

日本中東学会ニューズレター

**JAMES
NEWSLETTER**



No.114
7/30 2008

目 次

日本中東学会の課題と改革	2
日本中東学会第 25 回年次大会のお知らせ	3
理事会・総会報告	4
日本中東学会細則改正について	12
第 24 回年次大会報告	15
【公開講演・公開シンポジウム】	19
【研究発表の会場から】	21
【付設託児所について】	36
【第 24 回年次大会決算報告】	37
【大会を終えて】	38
『日本中東学会年報』編集委員会報告	39
アジア中東学会連盟AFMA大会のお知らせ	41
日本中東学会第 14 回公開講演会のお知らせ	42
日本学術振興会カイロ研究連絡センター	42
会員の異動	43
寄贈図書	48
学会事務局より	49
編集後記	49
会費納入のお願い	50

日本中東学会の課題と改革

第 12 期会長 私市 正年

日本中東学会第 24 回年次大会が 2008 年 5 月 24 日(土)、25 日(日)の両日、千葉大学にて開催された。今年はナクバ 60 周年にあたることから、24 日の公開シンポジウムは「パレスチナ問題と日本社会」というテーマが選ばれた。会場には満員になる程、多くの市民が集まり、活発な議論が交わされた。また翌日の研究発表も午前・午後あわせて 19 部会(JAMES-KAMES 特設セッションを含む)で、50 名余の発表が行われた。私は一部の報告しか聞けなかったが、年々学術的なレベルがあがっている印象を得た。昨年度の大会でも述べたが、大会全体を通じて、日本中東学会が開かれた学会であり、中東問題・イスラーム問題について広く市民と対話をしていく姿勢をもっていること、また日本が、西欧諸国とは異なる中東諸国との歴史的関係を有しているという、その立場を生かしつつ研究や交流を推進していくことの重要性などを再確認できたと思う。

本年次大会の開催にあたっては、主催校の千葉大学関係者、および実行委員の方々に心よりお礼を申し上げます。

さて、この 1 年間を振り返ってみると、学会の活動が実に多様で、またいくつかの課題を抱えていることがわかる。

2007 年 5 月、仙台での大会を終えると、6 月 30 日、千葉大学にて第 12 回公開講演会「中東・イスラーム世界の素顔を知る」(NIHU プログラム・イスラーム地域研究との共催)を開催した。紛争やテロといったニュース性の高いテーマではなく、ムスリムの日常生活に目を向けた企画であったが、集まった一般参加者の関心も高く、狙いは成功したといえよう。

10 月 27 日には、長野県の信州大学にて第 13 回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす(3) 日本のなかの中東、世界のなかの中東」(ニーズ対応型地域研究推進事業プロジェクト「アジアのなかの中東」他による後援)を開催した。あいにくの大雨のために、参加者はやや少なめであったが、それでも中学・高校における世界史教育のなかで、次世代を担う中・高校生に中東やイスラームをどう教えていくか、という実践的な問題が熱心に議論された。こうした問題に研究者が何を発信するのか、学会の課題でもあろう。

12 月 6 日、7 日に第 16 回韓国中東学会の年次大会があり、招待を受けて日本中東学会から会員 3 名が参加した。アカデミックな研究会を期待した者は、やや違和感を覚える大会であったようであるが、その様子については、ニューズレター No.113 のマイケル・ペン氏の報告をお読みいただきたい。また来る 9 月モンゴルで開催予定の AFMA(アジア中東学会連合)大会の具体的なプログラムは未だ明ら

かにされていない。このようにアジア諸国の中東研究組織のネットワークの確立・強化という課題は容易ではない。

日本中東学会に関わる問題として2点、ご報告とお願いをしておきたい。一つは、会員資格と会費納入の問題である。本大会でも報告予定者の中に、会費の未納者がいたため、実行委員会が直前になって大慌てすることがあった。そこには会員資格のあり方および会費前納制という制度的問題も関係しており、検討をすべき課題であろう。

もう一つは日本学術振興会カイロ研究連絡センターの存続問題への対応である。同センターは独立行政法人の合理化計画に沿い、見直しまたは廃止を閣議決定された。同センターは中東学会の会員に研究上の便宜を与えてきただけでなく、中東と日本とを結ぶ学术交流の拠点として重要な役割をはたしてきた。中東学会は全力をあげて同センターの存続に向けて関係当局に働きかけていきますので、会員諸氏のご協力をお願いします。なおケニアのナイロビ・センターも同じ立場にあり、同センターの存続についても支援をしていきたいと思えます。

日本中東学会第25回年次大会のお知らせ

来年度の年次大会は、広島市立大学で開催されることになりました。25回目の大会という、ちょうど四半世紀の節目の年に被爆地・広島で開催されることになりますが、実行委員会としては、中東世界と「ヒロシマ」が少しでも結びつく機会になるような、そのような大会にできればと考えております。

とは言え、広島市立大は創立されて14年目と歴史が未だ浅く、しかも国際学部、情報科学部、芸術学部の3学部から成る小規模な公立大学です。また、中東学会の会員も、今年で開催校、千葉大学同様に、専任スタッフは東南アジア地域研究(オマール・ファルーク)と中東地域研究(宇野)の2名だけです。そのため、会員で広島市やその周辺の大学で教鞭をとっている研究者の方々や学内の同僚たちの協力を得ながら、大会を準備して行くこととなります。これらの事情をご理解の上、会員皆さんの積極的な参加により大会を盛り上げていただきたく、よろしく願いする次第です。

開催日時：2009年5月16日(土)、17日(日)

開催場所：16日(土)／広島国際会議場(検討中)

17日(日)／広島市立大学



実行委員会

委員長： 宇野昌樹

事務局長： 堀井優(広島修道大学)

委員： 柿木伸之(哲学)、オマール・ファルーク、パスマシリ・ジャヤセーナ(博士後期課程)、吉原弘貴(博士前期課程) [以上、広島市立大]、赤堀雅幸、私市正年、佐藤道雄、外川昌彦、吉村慎太郎

大会は、例年通りで、1日目は公開シンポジウム(予定)と総会、2日目は研究発表になります。

研究発表を希望される方は、2008年9月16日(火)から12月12日(金)の間にご応募下さい。その際、①発表の骨子(日本語の場合は400字、欧文の場合は200 words程度。内容とテーマが分かるもの。正式の「要旨」は、プログラム確定後に、改めて発表予定者に執筆をお願いします。)を添付して下さい。②使用希望機器をお申し出下さい。③託児所の利用を希望される方は、お申し出下さい。

なお、応募方法については、次号以降のニューズレターや学会メーリングリスト、ホームページでも周知して行く予定です。

連絡先

日本中東学会第25回年次大会実行委員会事務局

〒731-3195 広島市安佐南区大塚東1-1-1

広島修道大学 堀井優研究室

TEL: 082-830-1226 FAX: 082-848-2765(共用)

E-mail: james2009@am25.intl.hiroshima-cu.ac.jp

(宇野 昌樹)

理事会・総会報告

【第1回理事会報告】

日時： 2008年5月24日(土)10:00-12:00

会場： 千葉大学 西千葉キャンパス けやき会館 2階 「会議室2」

出席： 私市正年会長、赤堀雅幸事務局長、飯塚正人、大塚和夫、大稔哲也、加藤博、栗田禎子、黒木英充、酒井啓子、桜井啓子、山岸智子、山口昭彦

欠席： 青山弘之、東長靖、羽田正、林佳世子

[議題] (議題の詳細については 6～11 ページの総会報告もご参照ください)

【報告事項】

1. 第 24 回年次大会について
2. 編集委員会報告
3. 国際交流委員報告
4. 渉外担当委員報告
5. 企画担当理事報告
6. ニュースレター担当理事報告
7. 日本学術振興会カイロ研究連絡センターの存続について
8. 事務局報告と理事会メーリングリストによる決議事項の確認

【審議事項】

1. 2007 年度事業報告・決算報告について承認した(詳細は大会議事録)。
2. 2008 年度事業計画・予算案について承認した(詳細は大会議事録)。
3. 第 2 回日本中東学会奨励賞選考委員 3 名を選任した。
4. 会員動向(詳細は大会議事録)。
5. 総会資料 3-1、3-2 を確認し、一部訂正の上、承認した。
6. 日本中東学会年報への非会員投稿制度の導入について、継続審議とした。
7. 第 25 回年次大会について、広島市立大学を主催校として承認した。
8. 大会発表査読制の導入について、継続審議とした。
9. 東洋文庫からの 2007 年度業務委託および 2008 年度連携事業について承認した(詳細は大会議事録)。

【日本中東学会第 24 回年次総会報告】

日時： 2008 年 5 月 24 日(土)

会場： 千葉大学西千葉キャンパスけやき会館大ホール

出席： 当日出席者 94 名、委任状提出 122 名、計 216 名

(会員数 699 名、定足数 5 分の 1 の 144 名により、総会成立)

1. 司会および総会役員を選出

吉田京子会員の司会により、議長として近藤信彰会員、書記として中川恵、堀井優両会員、議事録署名人として青柳かおる、佐島隆両会員を選出した。

2. 2007 年度事業報告および決算報告

赤堀雅幸事務局長および各担当理事より、総会資料に基づく報告があった。

(1) 事業報告(報告：赤堀雅幸事務局長)

- ・ 第 23 回年次大会を開催した(2007 年 5 月 12 日～13 日、東北大学)。

- ・ 公開講演「『NIHU プログラム・イスラーム地域研究』は何を目指すのか」(佐藤次高会員)
- ・ 公開シンポジウム「イスラームと中東研究をめぐって」
- ・ 研究発表は7会場 55本(日韓特別セッション2件5本を含む)。
- ・ 韓国中東学会から Chang Byung-Ock 会長を含め2名を招待した。
- ・ 第23回年次大会にあわせ開催した総会での承認により、学会細則 I-1 を改正した。
- ・ 日本中東学会年報(AJAMES)第23-1号、第23-2号の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行った。
- ・ 刊行にあたり、科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「学術定期刊行物」の助成を受けた。
- ・ 海外研究機関他、国内外寄贈先への発送を行った。
- ・ 国立情報学研究所論文情報ナビゲータ(CiNii)上で公開されるよう手配した。
- ・ 第12回公開講演会「中東・イスラーム世界の素顔を知る」を2007年6月30日に、千葉大学西千葉キャンパスけやき会館において、NIHU プログラム・イスラーム地域研究との共催により開催した。
- ・ 第13回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす(3) 日本のなかの中東、世界のなかの中東」を2007年10月27日に、信州大学教育学部、長野県教育委員会、長野市教育委員会、ニーズ対応型地域研究推進事業プロジェクト「アジアのなかの中東」を後援として、信州大学教育学部において開催した。
- ・ 第1回日本中東学会奨励賞を、青柳かおる会員に授与した。
- ・ 特別会計として、日本中東学会奨励賞基金を設定した。
- ・ ニュースレター和文4回(総頁84頁)を発行した。第110号(4/18、12頁)、第111号(7/30、年次大会特集、38頁)、第112号(10/20、10頁)、第113号(2008/2/4、24頁)。
- ・ 「日本における中東研究文献データベース1989-2007」(日本語版、英語版)につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ホームページにおいて公開した。
- ・ 会員名簿を発行した。
- ・ 学会ホームページおよび会員メーリングリストによる広報を行った。
- ・ 韓国中東学会第16回国際会議に会員3名が招待を受け、酒井啓子理事が会長代理として出席、Michael Penn 会員、吉村慎太郎会員が発表を行った。
- ・ 地域研究学会連絡協議会の幹事組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図るとともに、大塚和夫、大稔哲也両理事が担当して同協議会の事務局を引き受けた。
- ・ 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ活動した。

- ・ 大学評価・学位授与機構に、国立大学教育研究評価委員会専門委員候補者として、会員 6 名を推薦した。
 - ・ 独立行政法人整理合理化計画による日本学術振興会カイロ研究連絡センターの廃止等見直しについて、同センターを存続させるべく活動の方策を検討した。
 - ・ 東洋文庫からの委託事業として「日本における中東研究文献データベース」作成にかかる、研究動向調査、データ編集と作成を行った。
 - ・ 学会事務局を、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所から上智大学に移した。
 - ・ 会員の増減：2007 年度中には入会者 30 名、退会者 20 名、除籍者 27 名の異動があった。その結果、2008 年 3 月 31 日現在の会員数は 689 名（正会員 508 名／うち海外在住 22 名；学生会員 181 名／うち海外在住 3 名）となった。
- (2) 日本中東学会年報(AJAMES)編集報告(報告：山口昭彦編集委員長)
- ・ AJAMES 第 23-1 号、第 23-2 号が無事出版された。
 - ・ 国立情報学研究所論文情報ナビゲータ(CiNii)上での利用が促進されている。
- (3) 決算報告(報告：赤堀雅幸事務局長)
- ・ 東洋文庫からの業務委託費収入があり、この収入に相当する額が中東文献 DB 更新費として支出された以外は、全体としてほぼ予定通りの支出入が行われた。

収入

- ・ 会費値上げの影響によるものか、会費納入は低調であった。
- ・ AJAMES の販売が堅調であった。
- ・ AJAMES 広告費(Brill)3 号分がまだ振り込まれていない。
- ・ NII-ELS 著作権料収入の増額があった。

支出

- ・ 過去の事務局等に保管されていた資料の整理と廃棄を進め、保管すべき資料は貸倉庫で一括管理することとしたため、予算上にはない資料保管費が発生した。
- ・ AJAMES の印刷製本費が予算を上回ったのは、第 23-2 号が予定より大部になったことによる。
- ・ AJAMES/NL 発送費の超過は、今年度、第 22-2 号、第 23-1 号、第 23-2 号の 3 冊の送付が行われたことによる。
- ・ 公開講演会開催費は支出の抑制に努めたが、科研費による助成がないこともあり、予定事業実施のためには超過せざるをえなかった。

<採決> 以上の 2007 年度事業報告および決算報告について、総会はこれを承認した。

(4) 監査報告(報告：八木久美子監事)

- ・ 後藤明監事とともに会計監査を行った結果、決算についてはすべて適正であった。

<採決> 以上の 2007 年度監査報告について、総会はこれを承認した。

3. 2008 年度事業計画案および予算案

赤堀雅幸事務局長および担当理事より、総会資料に基づき、2008 年度事業計画および予算案が提案された。

(1) 事業計画一般について(説明：赤堀雅幸事務局長)

- ・ 第 24 回年次大会を 2008 年 5 月 24 日～25 日に、千葉大学において開催する。
- ・ 日本中東学会年報(AJAMES)第 24-1 号(2008 年 7 月)、第 24-2 号(2009 年 1 月)の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行う。
- ・ 刊行にあたり、科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「学術定期刊行物」の助成を受ける。
- ・ 第 14 回公開講演会「イスラームから多文化共生を考える」を、2008 年 10 月 25 日に、神戸国際会館において開催する。
- ・ 開催にあたり、科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「研究成果公開発表(B)」の助成を受ける。
- ・ 第 2 回日本中東学会奨励賞受賞者を選考する。
- ・ ニュースレターを年数回発行する。
- ・ 「日本における中東研究文献データベース 1989-2008」(日本語版、英語版)につき、東洋文庫との連携事業として、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ホームページにおいて公開する。
- ・ 学会ホームページおよび会員メーリングリストによる広報を行う。
- ・ 海外の関連学会との交流を促進する。
- ・ 第 24 回年次大会に、韓国中東学会から会長代行として Yu Dal-Seung 事務局長を招待する。
- ・ アジア中東学会連合第 7 回大会の開催に向けて、担当のモンゴル中東学会を支援する。
- ・ 地域研究会連絡協議会の幹事組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図る。引き続き事務局運営を引き受ける。
- ・ 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ必要な活動を行う。
- ・ 日本学術振興会カイロ研究連絡センターの廃止等見直しについて、同センターを存続させるべく要望書を関係諸機関に提出し、関連する研究教育機関に依頼して要望書を取りまとめるなど、可能な活動を実施する。
- ・ 会員調査を実施する。
- ・ 第 13 期役員選挙を実施する。
- ・ 2005 年度に休会制度が廃止されたことを受けて、2007 年度休会中の会員に向けて可能な限り連絡を取り、2008 年度年頭をもってすべての休会者を復会として扱うこととする。

- (2) AJAMES 第 24-1 号、第 24-2 号編集計画(説明：山口昭彦編集委員長)
- ・ AJAMES 第 24-1 号は、2008 年 7 月刊行予定で編集が進んでいる。第 24-2 号の投稿締め切りは2008年6月20日であり、すでに投稿がなされ始めている。
 - ・ 編集委員長が林佳世子委員から山口昭彦委員、副編集委員長が山口昭彦委員から青山弘之委員に交代する。
 - ・ 鷹木恵子委員に代わり、縄田浩志会員を編集委員とする。
- (3) 2008 年度予算案(説明：赤堀雅幸事務局長)
- ・ 今年度より収入の部における年会費予算案は、前年度納入率実績に 5%を上乗せした数値を用いることで、より実勢に近い金額を算定することにした。

収入

- ・ 東洋文庫からの収入費目名が昨年度決算と異なっているのは、先方との協議により事業の形態を受託業務から連携事業に変更したためである。
- ・ 今年度より、科研費出版助成金および公開講演会助成金については、それらが自己予算と組み合わせて執行されるべき性質の助成であるところから、本会計に繰り入れることとした。

支出

- ・ 資料保管費および諸雑費を新たに費目として計上した。
- ・ 昨年度の決算に鑑みて、アルバイト謝金、消耗品費、振込手数料を増額し、インターネット広報費、学会奨励賞運営費を減額した。
- ・ アジア中東学会連合第 7 回大会に備えて、国際交流費を増額した。
- ・ 今年度の年次大会が関東圏で開催されることから、会議費、交通費を減額した。
- ・ AJAMES 編集費および印刷製本費は、業務委託先からの見積書に基づいて若干の減額を行った。
- ・ ニュースレター発行費は、今年度刊行予定分が 1 号少ないため、昨年度より減額した。
- ・ 第 23 回年次大会実行委員会から本会計に振り込まれた年次大会特別基金繰入金は、事務局が誤って昨年度内に振替を完了しなかったため、今年度事業費に計上した。

<質疑応答>

- ・ 小杉泰会員からの質問：年会費収入予算案について、これまですべての未納額を計上していたのは、会費完納を目指す意志の表明であったが、今期の理事会はその目標を放棄するのか。
- ・ 赤堀雅幸事務局長からの回答：言うまでもなく当期の理事会は会費の完納を目標に掲げており、そのためにこそ現実性のある数値を掲げることが目標達成にいたる最適の方法であると判断する。加えて、前年度の会費納入率を示すことによって、会員に現状を知ってもらい、予算と決算の大幅な乖離によって予算

の健全性を損なうことなく、危機感をもっていただけるよう配慮している。

- ・ 小杉泰会員からの質問：昨年度実績に対して、納入率の上乗せが 5%というのは小さくないか。
- ・ 赤堀雅幸事務局長からの回答：前述の通り、現実的な目標の設定を心がけており、十分に達成可能な数値として 5%を計上した。決算がこれを大幅に上回ることを期待する。賛助会員の獲得などに向けて努力するなどに加え、将来的な会費前納制廃止も視野に入りたいと今期の理事会は考えており、そのために必要な方策を粛々と講じていく所存である。
- ・ 奈良本英佑会員からの付帯決議提案：予算案の承認にあわせて、総会の場において学会として「総会として会費納入率 100 パーセントを目指す」旨決議することを提案する。
- ・ 板垣雄三会員からの意見：会費前納制には本来、受益に対して支払うのではなく、まず資金を持ち寄って事業を実施しようとする学会の精神が込められていたのだが、公益社団法人化などが急務となる現在の状況で、前納制見直しの議論があることも理解できる。現実性を重視した予算案に切り替える以上、その達成に万全を期すとともに、科研費などにばかり依存することなく、中東学会らしい戦略を工夫することを望む。また、法人化については、積極的な取り組みがなされることを期待する。

<採決> 以上の 2008 年度事業計画案および予算案について、奈良本会員提案の付帯決議とあわせ、総会はこれを承認した。

4. 学会細則改正(説明：赤堀雅幸事務局長)

- ・ 「日本中東学会細則 I-3(会員の除名)」を「日本中東学会細則 I-3(会費滞納による退会)」として改正し、あわせて、現行の細則によって「除名扱い」とされた者については、さかのぼってすべて「退会」に改めたい。
- ・ 日本中東学会細則 II-3(振込手数料)から「海外からの送金は International Money Order を利用する」他の文言を削除し、あわせて、AJAMES、ウェブサイトなどで「銀行小切手は受け付けない」旨、明示することとしたい。
- ・ その他、改正日、附則および若干の形式上の改正を行いたい。

<採決> 以上の学会細則改正について、総会はこれを承認した。

5. 会長挨拶

- ・ 私市正年会長から、独立行政法人整理合理化計画による日本学術振興会カイロ研究連絡センターの廃止を含めた見直しへの対応、会費前納制の見直し、将来的な公益法人化などに言及しつつ挨拶があった。

6. 議事終了

- ・ 議事終了につき議長が降壇し、司会者により総会の閉会が宣言された。

2007年度決算

本会計

収入	07年度予算	07年度決算
2006年度よりの繰越金	5,217,830	5,217,830
年会費	9,031,000	5,125,574
正・学生会員	9,031,000	5,125,574
2004年度以前分	0	28,000
2005年度分	488,000	66,000
2006年度分	820,000	164,000
2007年度分	1,508,000	768,025
2008年度分	6,215,000	4,012,549
2009年度以降分	0	87,000
賛助会員	0	0
その他	1,555,500	2,486,286
科研費出版助成金	1,200,000	1,201,155
利子	500	8,670
AJAMES販売代金	250,000	311,960
海外郵送費実費	20,000	5,210
AJAMES広告費	75,000	0
NII-ELS著作権料	10,000	45,455
東洋文庫業務委託費	0	796,840
年次大会特別基金組入金	0	117,196
収入合計	15,804,330	12,829,690

(単位:円)

2008年度への繰越金内訳	5,575,777
郵便振替口座	1,872,827
三井住友銀行口座	3,707,870
現金	-4,920

支出	07年度予算	07年度決算
事務局費	1,435,000	1,452,814
アルバイト謝金	1,000,000	955,065
通信費	50,000	67,685
消耗品費	200,000	241,188
会議費	50,000	21,000
交通費	75,000	48,676
振込手数料	10,000	18,170
事務局移転費	50,000	13,270
資料保管費	0	87,760
事業費	4,905,000	5,801,099
大会開催費	300,000	300,000
大会会場費	100,000	88,074
AJAMES23号編集費	350,000	236,159
同欧文校閲費	300,000	190,992
同印刷製本費	2,200,000	2,595,180
編集委員会交通費	200,000	117,420
ニューズレター発行費	500,000	395,220
AJAMES/NL発送費	400,000	531,800
AJAMES海外発送費	100,000	149,975
選挙費用	0	0
国際交流費	100,000	75,075
インターネット広報費	100,000	41,040
公開講演会開催費	150,000	217,838
学会奨励賞運営費	50,000	7,326
中東文献DB更新費	50,000	850,000
地域研究学会協議会分担金	5,000	5,000
支出合計	6,340,000	7,253,913
2008年度への繰越金	9,464,330	5,575,777
総計	15,804,330	12,829,690

(単位:円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2006年度よりの繰越金	454,611	
利子	560	
2008年度への繰越金		455,171
合計	455,171	455,171

(単位:円)

年次大会時託児所特別基金

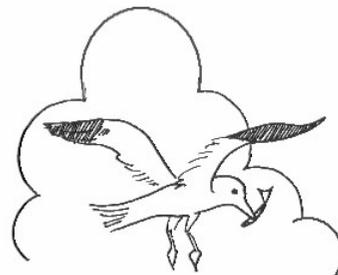
費目	収入	支出
2006年度よりの繰越金	32,015	
利子	41	
2008年度への繰越金		32,056
合計	32,056	32,056

(単位:円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2006年度よりの繰越金	0	
寄付	1,400,000	
利子	792	
第1回学会奨励賞奨励金		200,000
2008年度への繰越金		1,200,792
合計	1,400,792	1,400,792

(単位:円)



2008年度予算

本会計

収入	07年度予算	08年度予算
2006年度よりの繰越金	5,217,830	—
2007年度よりの繰越金	—	5,575,777
年会費	9,031,000	5,820,000
正・学生会員	9,031,000	5,820,000
2005年度以前分	488,000	21,000
2006年度分	820,000	160,000
2007年度分	1,508,000	640,000
2008年度分	6,215,000	946,000
2009年度分	—	4,053,000
賛助会員	0	0
その他	1,555,500	3,062,465
科研費出版助成金	1,200,000	1,300,000
科研費公開講演会助成金	0	600,000
利子	500	8,000
AJAMES販売代金	250,000	250,000
海外郵送費実費	20,000	10,000
AJAMES広告費	75,000	0
東洋文庫連携事業分担金	0	790,000
NII-ELS著作権料	10,000	104,465
収入合計	15,804,330	14,458,242

(単位:円)

支出	07年度予算	08年度予算
事務局費	1,435,000	1,455,000
アルバイト謝金	1,000,000	1,000,000
通信費	50,000	70,000
消耗品費	200,000	220,000
会議費	50,000	25,000
交通費	75,000	20,000
振込手数料	10,000	20,000
事務局移転費	50,000	0
資料保管費	0	100,000
事業費	4,905,000	6,166,456
大会開催費	300,000	300,000
大会会場費	100,000	100,000
AJAMES編集費	350,000	330,000
同欧文校閲費	300,000	300,000
同印刷製本費	2,200,000	2,059,260
編集委員会交通費	200,000	200,000
ニューズレター等発行費	500,000	400,000
AJAMES/NL発送費	400,000	400,000
AJAMES海外発送費	100,000	100,000
選挙費用	0	100,000
国際交流費	100,000	150,000
インターネット広報費	100,000	50,000
公開講演会開催費	150,000	650,000
学会奨励賞運営費	50,000	10,000
中東文献DB更新費	50,000	850,000
地域研究学会協議会分担金	5,000	0
特別基金繰り入れ	0	117,196
諸雑費	0	50,000
支出合計	6,340,000	7,621,456
2008年度への繰越金	9,464,330	
2008年度会費分留保		4,053,000
2009年度への繰越金		2,783,786
総計	15,804,330	14,458,242

(単位:円)

(参考)各年度正・学生会員会費未納額および前年度納付率

年度	未納額	前年度納付率
2004年度分		13%
2005年度分	116,000	14%
2006年度分	328,000	20%
2007年度分	640,000	51%
2008年度分	1,690,000	65%
2009年度分	5,790,000	
合計	8,564,000	

*各年度の年会費収入予算は、その年の会費未納額に、その前年度分会費の前年度における納付率に5%をかけて算出している

例)

2008年度分会費予想収入＝2008年度会費未納額×(2007年度会費納付率+5)÷100

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2007年度よりの繰越金	455,171	
本会計からの繰り入れ	117,196	
利子	400	
2009年度への繰越金		572,767
合計	572,767	572,767

(単位:円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2007年度よりの繰越金	1,200,792	
利子	700	
2009年度への繰越金		1,201,492
合計	1,201,492	1,201,492

(単位:円)

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2007年度よりの繰越金	32,056	
利子	30	
2009年度への繰越金		32,086
合計	32,086	32,086

(単位:円)

日本中東学会細則改正について

2008年5月24日の総会で、次のように細則の改正が承認されましたので、お知らせいたします。

日本中東学会細則 新旧対照表

新	旧
<p>平成 11 年 5 月 15 日制定・施行 平成 12 年 5 月 13 日改正 平成 18 年 5 月 13 日改正 平成 19 年 5 月 12 日改正 <u>平成 20 年 5 月 24 日改正</u></p> <p>I. 会員について</p> <p>2. 海外在住会員の会費 AJAMES 等を留守宅に送付する場合は、国内在住会員と同額とする。 AJAMES 等を海外の住所に送付する場合は、送料を負担してもらう。</p> <p>3. <u>会費滞納による退会</u> 3 年間以上の長期会費滞納者は退会とする(ただし、該当する会員には可能な限り事務局から事前に注意を喚起する)。復会にあたっては滞納会費の全納を要する。</p> <p>II. 会費について</p> <p>3. 振込手数料 会員の負担とする。<u>受取手数料が生じる場合は、これも送金者が負担するものとする。</u></p> <p>VI. 会誌編集委員会について</p> <p>2. 編集委員会と学会事務局について 編集事務を学会事務局から分離し、編集委員長の采配の下に置く。 編集委員会は原稿募集から AJAMES 完成までの業務を請け負う。</p> <p>IX. 附則 本細則は制定・改正日より施行される。</p>	<p>平成 11 年 5 月 15 日制定・施行 平成 12 年 5 月 13 日改正 平成 18 年 5 月 13 日改正 平成 19 年 5 月 12 日改正</p> <p>I. 会員について</p> <p>2. 海外在住会員の会費 ・AJAMES 等を留守宅に送付する場合は、国内在住会員と同額とする。 ・AJAMES 等を海外の住所に送付する場合は、送料を負担してもらう。</p> <p>3. <u>会員の除名</u> 3 年間以上の長期会費滞納者は除名扱いとする。 (ただし、<u>滞納者</u>には事務局から度々注意を喚起する。)</p> <p>II. 会費について</p> <p>3. 振込手数料 ・会員の負担とする。<u>海外からの送金は International Money Order を利用する。銀行を利用する場合は、受け取り手数料も送金者が負担するものとする。</u></p> <p>VI. 会誌編集委員会について</p> <p>2. 編集委員会と学会事務局について ・編集事務を学会事務局から分離し、編集委員長の采配の下に置く。 ・編集委員会は原稿募集から AJAMES 完成までの業務を請け負う。</p> <p>IX. 附則 本細則は制定・改正日より施行されるが、<u>II-1(会費)の改正は 2008 年度分より適用されるものとする。</u></p>

日本中東学会細則

平成11年5月15日制定・施行
平成12年5月13日改正
平成18年5月13日改正
平成19年5月12日改正
平成20年5月24日改正

I. 会員について

1. 会員の手続き

入会、諸変更、退会届は必ず提出することとする。

2. 会員の権利の停止

会費滞納者には滞納した年度の学会発表・AJAMES への投稿等、会員の権利を停止する。

3. 会費滞納による退会

3年間以上の長期会費滞納者は退会とする(ただし、該当する会員には可能な限り事務局から事前に注意を喚起する)。復会にあたっては滞納会費の全納を要する。

II. 会費について

1. 会費

正会員は年額10,000円、学生会員は年額5,000円を納入するものとする。

また、賛助会員は1口50,000円(原則2口以上)を納入するものとする。

2. 海外在住会員の会費

AJAMES等を留守宅に送付する場合は、国内在住会員と同額とする。

AJAMES等を海外の住所に送付する場合は、送料を負担してもらう。

3. 振込手数料

会員の負担とする。受取手数料が生じる場合は、これも送金者が負担するものとする。

III. 役員について

1. 監事の内1名は選挙管理委員を務めることとする。

IV. 会議について

1. 会議の定足数

理事会は理事の2分の1以上、評議員会は評議員の2分の1以上、総会は会員の5分の1以上の出席がなければ成立しない。

ただし、予め提出された委任状をもって出席者数に加算することができる。

V. 学会事務局について

1. 事務局は、理事会の協議および理事会と関係者の協議により、会長の任期に合わせて大学・研究機関ベースで形成されるものとする。

2. 事務局は学会事務全般を担当すると同時に、和文および英文ニューズレターを発行し、会員相互の交流を促進するものとする。

VI. 会誌編集委員会について

1. 理事会は会誌発行のために編集委員若干名を委嘱し、編集委員は編集委員会を構成する。

編集委員長は編集委員の互選で選出するものとする。

2. 編集委員会と学会事務局について
編集事務を学会事務局から分離し、編集委員長の采配の下に置く。
編集委員会は原稿募集から AJAMES 完成までの業務を請け負う。

VII. 国際交流委員会について

1. 理事会は、国際交流に関わる活動をおこなうため、国際交流委員長を任命し、また国際交流委員若干名を委嘱する。
国際交流委員長および国際交流委員は国際交流委員会を構成する。

VIII. 役員選挙について

1. 理事会指名による 4 名(監事 1 名を含む)が選挙管理委員会を構成するものとする。
選挙管理委員会は、評議員、理事の選挙を実施・管理するものとする。
2. 選挙によって評議員 60 名以内、理事 13 名を選出するものとする。
3. 同点の場合の選出法は、抽選によるものとする。

IX. 附則

本細則は制定・改正日より施行される。

第 24 回年次大会報告

【大会プログラム】

5 月 23 日(土) 公開公演・公開シンポジウム、総会 (千葉大学けやき会館)

開会の辞(私市正年会長)、歓迎の辞(齋藤康千葉大学長)

公開公演(広河隆一、板垣雄三)

リレー討論(臼杵陽、岡真理、立山良司、田中好子、田浪亜央江、奈良本英佑、平山健太郎、藤田進)

日本中東学会総会

懇親会(生協食堂)

5 月 24 日(日) 研究発表、特別部会

9:30~12:20 午前の部 (101~107 部会)

13:20~15:20 午後の部 (201~207 部会)

15:40~17:00 午後の部 (302~307 部会)

101 部会

高岩伸任(一橋大学大学院)「近代エジプトのワクフ改革」

平野淳一(京都大学大学院)「アフガーニー再考—生涯の再構築と思想的位置づけをめぐって」

高尾賢一郎(同志社大学大学院)「現代スーフィズムに見るサラフィズムとの相克—『サラフィー・スーフィー』理解から」

飯山陽(上智大学非常勤講師)「近現代イスラーム思想におけるマサラハ」

102 部会

小島宏(早稲田大学)「在日ムスリムにおける宗教実践の規定要因」

山岸智子(明治大学)「バハレーンのアーシェーラー」

朝田郁(京都大学大学院)「現代ザンジバルにおけるアラウィー教団の展開」

藤井千晶(京都大学大学院)「東アフリカ沿岸部における預言者医学の実践」

103 部会

鷺見朗子(京都ノートルダム女子大学)・鷺見克典(名古屋工業大学)「アラビア語学習・教育における興味と動機づけ—アラブ文化要素の意義」

【企画セッション I】「日本におけるアラビア語教育—Learners Oriented Teachingによる教習と学修」 企画者：岡本久美子(大阪大学)

岡本久美子(大阪大学)「アメリカの大学におけるアラビア語の授業について」

榮谷温子(東京外国語大学非常勤講師)「日本語によるアラビア語入門書の文化面についての分析」

宮川佳子(日本アラビア語検定協会)「実用アラビア語検定試験とアラビア語のオンラインレッスンについての現状と今後の展望」

104 部会

堀抜功二(京都大学大学院)「アラブ首長国連邦における開発戦略と人口バランス問題—ザイド時代(1971-2004)の検証」

石黒大岳(神戸大学大学院)「クウェートにおける選挙制度改革と政治変動」

黒田安昌(ハワイ大学)“Explore the Nature and Scope of the Development of Civil Society in the Greater Cairo Area”

Housam Darwish(東京外国語大学大学院)“The Muslim Brotherhood: Mubarak’s Relationship and the Crisis of the Opposition in Light of the Latest Developments in Egypt”

105 部会

岡野内正(法政大学)「パレスチナ問題を解く鍵としてのホロコーストとナクバー—公共の場での記憶の掘り起こし・謝罪・賠償から近代的国民国家の終焉へ」

鶴見太郎(東京大学大学院)「シオニストはパレスチナに何をもち込んだか—パレスチナ紛争の背景としてのシオニズムの背景を再考する」

106 部会

小笠原弘幸(日本学術振興会)「オスマン朝におけるモンゴル観—15・16世紀を中心に」

村山さえ子(お茶の水女子大学大学院)「バグダードにおけるマドラサの発展と変遷—ニザーミーヤ学院からムスタンシリーヤ学院まで」

阿久津正幸(早稲田大学イスラーム地域研究所客員研究員)「ニザーミーヤ学院時代(5/11世紀)の宗教諸学とイスナード概念—高等教育機関、学問的伝統と権威、およびその政治的・社会的含意をめぐって」

107 部会

大河原知樹(東北大学)「フランス委任統治期シリアにおける結婚登録制度と結婚性向—序説」

嶺崎寛子(お茶の水女子大学大学院)「イスラーム言説の役割—女性説教師の活動を通じて」

後藤絵美(日本学術振興会)「イスラームの知と実践のあいだ—ヒジャーブ着用に関するザイナブ・アル＝ガザーリーの語りから見えるもの」

鳥山純子(お茶の水女子大学大学院)「美しくなる理由—現代カイロの若年女性教師に見る化粧」

201部会

加藤博・岩崎えり奈(一橋大学)“Rashda: Formation of a Village in Dakhla Oasis”

関佳奈子(上智大学大学院)「19世紀末～20世紀初頭のメリーリャにおける異教徒の混住—1887年と1904年の住民基本台帳を素材として」

202部会

【JAMES-KAMES特設セッションI】

YU Dal Seung (韓国外国語大学校) “A Study on the Character of Iranian Political Culture”

Arezoo FAKHREJAAHANI (東京外国語大学) “Iranian Towns in Canada: The Iranian Community in Vancouver and Toronto”

【JAMES-KAMES特設セッションII】 Part 1

Elmostafa REZRAZI (ムハンマド5世大学) “Japanese Diplomacy in the Middle East after the US Invasion of Iraq”

203部会

【企画セッションII】「中東政治体制研究における一般理論と事例研究の調和と相克」
企画者：浜中新吾(山形大学)

浜中新吾(山形大学)「政治体制の安定と変動に関する理論と事例研究の邂逅—エジプト・トルコ・イスラエル」

福富満久(中東調査会)「選挙、民主化、民主主義の定着—中東・北アフリカにおける実態と独裁の均衡」

今井真士(慶應義塾大学大学院)「協定と権威主義体制の持続—比較歴史社会科学アプローチの観点からエジプトとその他中東地域の事例を用いて」

204 部会

溝渕正季(上智大学大学院)「レバノン・ヒズブッラーの起源と誕生に関する政治社会学的分析—導入と予備的考察」

山尾大(京都大学大学院)「1980年代のイラク・イスラーム革命思想の変容—亡命期イスラーム政党をめぐる考察」

黒田賢治(京都大学大学院)「ポスト・ホメイニー期におけるハウザ制度と法学権威—コムにおける現地調査を中心に」

205部会

錦田愛子(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)「レバノンのパレスチナ難民に関する法的地位の動向—『7つの村』をめぐる国籍付与問題」

飛奈裕美(京都大学大学院)「エルサレムにおけるイスラエル占領政策とパレスチナ人の戦略—住居建設の事例から」

206部会

伊藤寛了(東京外国語大学大学院)「トルコ共和国初期における宗教保守層の出現—イノニユの時代(1938-1950)における『イスラームの復興』の一形態として」

宇野陽子(津田塾大学国際関係研究所)「トルコ大国民議会第一議会における野党と外交—ローザンヌ条約論争を中心に」

山下王世(東京外国語大学)「コジャテペ・モスク建設の文化的背景—『アヤソフィア論争』の影響」

207部会

大工原桂(国際金融情報センター)「オイルブームに沸く中東産油国経済の構造変動」

和氣太司((独)国立女性教育会館)「湾岸諸国における高等教育の発展とグローバル化」

302部会

【JAMES-KAMES特設セッションII】 Part 2

Michel PENN(新月研究所)“Japanese Public Reactions to Terrorism in the United States in September 2001”

Khaldon AZHARI(パンオリエント・ニュース) “The Japanese Media and Its Coverage of Middle Eastern Wars”

303部会(D24)

北澤義之(京都産業大学)「第15期ヨルダン下院議員選挙の特徴について」

青山弘之(東京外国語大学)・高岡豊(中東調査会)「シリア・アラブ共和国での全国世論調査(2007年)—調査結果に見るシリア国民の政治意識」

304部会(D31)

丸山大介(京都大学大学院)「スンナ派神学のワリー論」

茂木明石(上智大学大学院)「イマーム・シャーフィイーのミフナ(試練)—知識、血統と聖性」

305部会

佐々木紳(東京大学大学院)「オスマン帝国と普仏戦争—情勢分析からパン・イスラーム主義へ」

長谷部圭彦(東京大学大学院)「近代オスマン帝国における諮問機関—国家評議会教育局を例に」

306部会

幸加木文(東京外国語大学大学院)「現代トルコにおける『イスラーム派』の世俗主義思想—フェトウッラー・ギュレンの位置付け」

若松大樹(上智大学大学院)「トルコ共和国におけるアレヴィー集落の社会変化に関する—考察—キュタフヤ県の事例を中心に」

307部会

長岡慎介(京都大学大学院)「現代イスラーム金融における異時点間取引をめぐる諸問題—その理論的含意と実践へのインパクト」

上山一(一橋大学大学院)「イスラーム金融・銀行研究の動向—イスラーム銀行のリスク分析を中心に」

【公開講演・公開シンポジウム】

「パレスチナ問題と日本社会」と題するシンポジウムにおいて前半は広河隆一・板垣雄三の両氏による基調講演、後半はリレー討論であった。今年 2008 年はパレスチナにとってはナクバ 60 周年ではある。しかし、パレスチナを取り巻く状況は最悪であり、そのような状況下で日本社会にとってのパレスチナ問題とは何であったのかを改めて問う企画は時宜を得たものであった。広河氏はこのナクバ 60 周年を機にドキュメンタリーフィルム「パレスチナ 1948—NAKBA」を完成させた。この作品は、英語、アラビア語、ヘブライ語をはじめとする様々な言語のヴァージョンがあり、日本はもちろん、世界各地でも上映されており、国際的にも高く評価されている。本学会の基調講演でもアーカイヴズ版「ナクバ」の冒頭の一部が上映された。広河氏にとってこのドキュメンタリーの完成はこれまでのパレスチナあるいはイスラエルに関する仕事の集大成であり、これからの仕事への新たなステップになるものであると感じ取ることができた。広河氏がこれまで撮影してきたナクバに関わる写真・フィルム・ビデオ・DVD などかたちで集積された膨大な量の情報データを蓄積・整理・提供する情報センターをわれわれ中東研究者も協力して設立することが急務であることを痛感した。また、板垣雄三氏は「日本問



題としてのパレスチナ問題—日本における中東研究の未来」と題して講演を行なった。これまでの日本とパレスチナ問題との関わりを批判的な視点から、まず、1970年代以降、板垣氏自身がかかわったパレスチナ問題の諸相を個人的な感想を踏まえて紹介した。次に、第一次世界大戦というパレスチナ問題の出発点を確認した上で、日本の内なる植民地主義への洞察を梃子に、日本の中東研究の課題とヴィジョンが提示されるはずであったが、非常に残念ながら時間切れで課題とヴィジョンに関しては聴くことができなかった。配布された12ページに及ぶ「参考資料」の小冊子は、第一次世界大戦以降の内村鑑三のキリスト再臨運動、大川周明のシオニズム論、徳富蘆花夫妻のパレスチナ紀行、柳田國男にとっての国際連盟委任統治委員会、出口王仁三郎の『霊界物語』、矢内原忠雄の植民政策研究、そして安江仙弘と酒井勝軍を通して、パレスチナ問題が大正期日本の思想・文化においてどのように位置づけられてきたを資料に即して簡潔に整理したものであるが、われわれが今後とも継承して深めていくべき多くの課題が含まれていた。

シンポジウム後半は広河・板垣両氏に加え、新たに8氏が参加したリレー討論であった。報告者・討論者として参加された方々は発言順に言えば、藤田進氏、奈良本英佑氏、藤田進氏、立山良司氏、平山健太郎氏、田中好子氏、岡真理氏、そして田浪亜央江氏であったが、それぞれの報告は日本とパレスチナ問題とのかかわりをそれぞれの立場から反映するものであった。発言者の経歴あるいはパレスチナ問題への関わり・アプローチ(アカデミズム、ジャーナリズム、国際機関、NGOなど実務的関わりから実践的アプローチまで)、世代(パレスチナ解放運動が高揚した1970年代を現場で目撃した世代から第二次インティファダの世代まで)の観点から多様であり、とりわけ報告者8名のうち3名が女性というのは日本中東学会におけるジェンダーバランスを考へても顕著な特徴であるといえるし、また、パレスチナ研究においては若い世代になればなるほど女性が増える傾向があるという慶賀すべき状況にある。以上の点からはヴァラエティに富んだ、実によく考え抜かれた絶妙な人選であったと思う。私自身、このリレー討論の司会者として参加し、とりまとめの発言をしたが、いささか誇張した表現をすれば、日本におけるパレスチナ問題をめぐる「歴史的パノラマ」を短時間に観てしまったかのような気分を襲われた。残念ながら、このような多士済々の面々によるリレー討論であったので話題も多岐にわたり、ここでは紙幅の関係上、それぞれの報告の内容にまで踏み込むことはできないが、質疑応答をフロアにいったん開くとアイヌ問

題、在日問題にまで議論が及んだのはパレスチナ問題が同時代を象徴する代表的な問題であることを顕著に示したものであろう。時間の制約で十分な議論はできなかったとはいえ、何はともあれ、日本のパレスチナ問題とかかわりの諸相を再考するための機会をもつことができたことを企画者である大会実行委員長の栗田禎子氏に心から感謝申し上げたい。(臼杵 陽)

【研究発表の会場から】

101 部会

第1部会午前部では高岩伸任氏、平野淳一氏、高尾賢一郎氏、飯山陽氏による発表が行われた。各報告にはそれぞれ20名前後の聴衆が集まった。

高岩氏はまず、近代エジプトにおけるワクフ改革の歴史を概観し、管財人の不正行為や非効率なワクフ運営が広く問題視された結果、足かけ20年にわたる断続的な議会審議を経て施行されたワクフ法(1946年)が現実のワクフ運営に与えたインパクトを分析した。この法のなかでワクフ運営の改善に特に効果があったと思われるのは、管財人の説明責任と責務が明文化され、罰則も導入されたことである。さらに氏はワクフ法の定めるモスク以外のワクフ、とりわけ家族ワクフが①取消し・変更不可②永遠③譲渡・移転の禁止というワクフの基本原則と思われるものに抵触することを指摘し、これをワクフと呼べるのかと問題提起したうえで、英米で発達した信託制度(トラスト)との簡単な比較を行った。

続いて平野氏は、20世紀初頭から今日に至るアフガーニー研究を回顧・検証し、そこに見られる方法論的な問題を指摘。オリエンタリズムやサラフィズム、また既存の国民国家体制にとらわれることなく、当時の地域システムの文脈に着床したかたちで、より内在的な視点から実証的にアフガーニーを再評価する必要性を訴え、アフガーニーの三大主著の内容をそれぞれの執筆背景と結びつけて考察することで、出自や宗派、また「信仰者」か「不信仰者」かといった論点が無意味あるいは無益であると論じた。氏によれば、アフガーニーにあって注目すべき点はむしろ「<他者>への開かれ」にあり、ここから西洋近代と不断に交流する、開かれた「近代イスラーム像」を再構築することが今後の課題となる。

一方、休憩をはさんで演壇に立った高尾氏は、現代シリアでナクシュバンディー教団のシャイフを務めたアフマド・クフターロー(2004年没)の「サラフィー・スーフィー」なる自称を手がかりに、現代スーフィズムがサラフィズムに対応するさまを描き出した。クフターローは定義困難な「サラフィー」を「正しき先人(サラフ)に従う者」、「スーフィズム」を「魂の清め」とそれぞれ定義し、率先して名乗ってしまうことで、スーフィズムの汚名を返上しようとした形跡がある。一般に現代スーフィズムは、サラフィズムの攻勢によって自己変革を迫られているように思われているが、クフターローにとってサラフィズムとはむしろ、安価ながらも効果

のある免罪符の役割を見込めるものだったのである。

最後は飯山氏が、スンナ派前近代のマスラハに関する自身の研究蓄積をもとに、近現代と前近代の理論的断絶だけを強調してきたこれまでの近現代マスラハ研究を批判。マスラハに期待された役割は一貫して「イスラーム法の危機の救済」——もともと「イスラーム法の危機」の意味するところは前近代のマスラハ理論成立時と近現代の「マスラハ・ブーム」とでは大きく異なる——にあったとして、両者の連続性にも目を向ける必要を論じた。また、たとえばユースフ・カラダーウィーが「法の目的(=マスラハ)」を濫用する功利主義者を「西欧の下僕」と非難している事実を論拠に、近現代のマスラハ理論が「功利主義的」であるとしたホーラーニーやハッラークの主張にも疑問を呈した。

なお、各発表の後には多岐にわたる専門分野を持つ聴衆との間で、それぞれ活発な質疑応答が行われた。いずれの発表も内容が明快で、大量の文献を渉猟した結果立論されたことが明らかであり、ゆえに発表後のわずかな時間でも有意義な議論が可能になったと思われる。4人の発表者の今後に期待したい。(飯塚 正人)

102 部会

小島宏氏の研究発表「在日ムスリムにおける宗教実践の規定要因」は、2005～06年に実施された在日ムスリム調査(店田廣文氏、岡井宏文氏)の個票データを分析したものである。国際的に移民と宗教に関する調査分析が増加している中において、イスラム移民に限定し実施された同調査は重要である。小島氏は本調査データについてロジット分析の手法を適用し、信仰心、規範遵守、礼拝(集団礼拝)、布教活動(信仰強化)の宗教実践の規定要因の解明を試みている。その一例として、30～34歳の年齢層に規範遵守、週2回以上の礼拝参加を厳格に行う者が多いことが明らかになった。今回示された小島氏の分析手法および同調査の発展が、日本の多文化共生を探る一助となると期待が持てる発表であった。

山岸智子氏の発表「バハレーンのアーシューラー」は、2004年および08年の2度にわたるバハレーンでのアーシューラーに関する現地調査報告である。山岸氏はイラン、パキスタンでの哀悼行事の観察経験を活かし、バハレーンの同行事の特徴を映像、音声を活用しつつ明快に報告した。特に、行進参加者のポスターやメッセージから読み取れるイランやヒズボラなどとのシーアの連帯性についての指摘、また哀悼行事にちなんで売られる商品を通してマレーシア、インドとの商業ネットワーク、商品キャラクターにみる東アジアとの文化交流についての指摘は大変興味深い。グローバル化社会における文化や消費行動を再考する上でも貴重な発表であった。(水口 章)

「現代ザンジバルにおけるアラウィー教団の展開」と題された朝田郁氏の報告は、タリーカ・アラウィーヤの宗教実践と社会活動の実態を、ザンジバルでの現地調査

に基づいて、明らかにしたもので、未だ現状調査はほとんど手つかずという分野へと挑戦した研究である。この教団の特徴は、加入儀礼やメンバーシップのイジヤーズがなく、シャイフを軸にした教団組織もないこと、他方、教育活動に力を注ぎ、モスクなどで神や預言者、アラウィー一族への祈念を主たる儀礼実践としている点とされ、それがこの教団の主たる担い手であるハドラミーの先人たちから継承してきた「生き方」や知の体系であるとの考察が述べられた。報告後には、教団の財源や女性の団員などについての質疑応答があった。

藤井千晶氏の「東アフリカ沿岸部における預言者医学の実践」と題した報告もまた、意欲的なもので、ザンジバルでの現地調査に基づき、さまざまな医療実践があるなかで「預言者の医学」と呼ばれる医療実践の特徴が明かにされた。現在もそれが盛んである理由として、日常生活とも結びついた身近な医療であること、シエタニ(シャイターン)払いなど土地固有の文化にも対応しており、またイスラームの教えに忠実でありたいと願う人々の要求を満たしている点などが挙げられた。いずれも、若手研究者の今後の研究の深化とまた活躍とが大いに楽しみに思われるような研究発表であった。(鷹木 恵子)

103 部会

最初の発表は、鷺見朗子、鷺見克典両氏による「アラビア語学習・教育における興味と動機づけ—アラブ文化要素の意義」であった。本研究では、アラビア語教育への文化の組み入れは、言語習得の促進と学習者の動機づけに効果的との前提に立ち、チュニスの日本人アラビア語学習者と、チュニスの語学学校の教師、米国の大学のアラビア語教師に面接調査を行ない、その結果を分析した。その結果、アラブ文化は学習のきっかけ及び継続の種々の動機となっていることが明らかとなった。反面、教師が授業で扱う文化トピックが、必ずしも学習者の関心に合致しておらず、文化を言語習得の動機づけとするには、教師が学習者の関心を把握し、適切なトピックを選択する必要性も指摘された。(榮谷 温子)

(企画セッション I)

「アメリカの大学におけるアラビア語の授業について」と題する発表で岡本は、2007年海外先進教育実践支援(文科省)により、旧大阪外国語大学の研修チームの一員としてアメリカの協定校3大学を訪問し、アラビア語教育の実際を見て、また授業担当教員との議論を通じて学んだところを発表した。3大学ともそれぞれに特徴があり、教室での学習やイスラームを通じた学習、また学外での課外活動を通じた学習など今後の教育に参考になると思われる要素を紹介した。発表時間内に当該プロジェクトの目的のひとつでもあった「試行テスト」についての詳細を話すことが出来ず、質疑応答の時間に問題提起とともに簡単に話すのみにとどまったのは残念であった。

榮谷温子氏による発表「日本語によるアラビア語入門書の文化面についての分析」では、日本の大学で用いられているアラビア語テキストを取り上げ、そこに挙げられている単語や例文などを分析することで背景の文化をみてゆこうとするものであった。各テキストのなかの単語を、性別を中心に詳細な統計をとり、女性よりも男性に関するものが多いという結論を紹介した。また日本語による入門書においては、学習方法を文法訳読方式にしているため、そのテキストだけで背景となる文化や社会を学習者に理解させることは不可能であり、イスラームも含めてアラブ文化も同時に学べるようなテキストの編纂の必要性を語った。

宮川佳子氏による発表「実用アラビア語検定試験とアラビア語のオンラインレッスンについての現状と今後の展望」では、昨年日本で初めて行われたアラビア語検定試験（日本アラビア語検定協会実施）を通じ、同時に行われた受験者へのアンケート結果の分析も加えて、日本におけるアラビア語学習者の姿を具体的な数字を挙げて紹介した。協会会長である発表者から協会設立の目的や検定試験の意義が話され、試験の各レベルの設定についても具体的に聞き取り問題が提示されて紹介された。上級レベルでは独学だけの合格率が低いという結果が報告され、学校に通いにくい学習者のためのオンラインレッスンについての協会の取り組みも話された。（岡本 久美子）

104 部会

104 部会は現代アラブ諸国の政治や社会をあつかった。最初の2つは若手研究者による湾岸関連の発表であった。1番手の掘抜功二「アラブ首長国連邦における開発戦略と人口バランス問題—ザード時代(1971—2004)の検証」は、人口の8割以上が外国人というアラブ首長国(UAE)の社会構成の問題を取り上げ、それが開発と密接にかかわっていることを明らかにし、さらに UAE 人同士の結婚を奨励する「結婚基金」政策を検討しながら、UAE 社会の構造的矛盾を分析した。次の石黒大岳「クウェートにおける選挙制度改革と政治変動」は、2006年のクウェート国民議会における選挙区改正の議論を、同国では禁止されている政党を公認する過程の端緒としてとらえる見かたを提示した。油価高騰やドバイの発展等で湾岸への関心が高まってきたためか、前日の懇親会でも湾岸研究をしたいという若手がずいぶん増えたという印象をもったが、この104部会でもそれなりの人数が集まり、また積極的な質疑応答が行われた。文字どおり隔世の感であった。

後半2人は現代エジプトに関する発表であった。英語による発表だったためか、聴衆の数が減ってしまったことは残念であった。ただし、同じ現代アラブをあつかっているとはいえ、湾岸とエジプトを同一部会に入れることにはやはり違和感がある。今後の検討課題であろう。

後半最初の発表は Yasumasa Kuroda, “Explore the Nature and Scope of the Development of Civil Society in the Greater Cairo Area”で、2007年にカイロで行った

インタビュー調査をもとに、現代エジプト人の社会・政治意識を分析する試みであった。非民主的な政治体制を反映した、エジプト人の政治に対する諦観や慈善活動に対する積極的な関心がきれいに数値化されて興味深い内容になっていた。なお、本発表に際し、司会者の不手際により、発表時間がスケジュールとずれてしまった。この場を借りて発表者および会場にいた皆さまに陳謝したい。最後は Housam Darwisheh, “The Muslim Brotherhood: Mubarak’s Relationship and the Crisis of the Opposition in Light of the Latest Developments in Egypt”である。この発表でも権威主義的な体制のもとで社会はどのようにあるのか、という現代エジプト研究における基本テーマがあつかわれたが、こちらはもっぱらムバーラク体制と野党・反体制派の関係に焦点が当てられた。政権側の政策により野党が法的・政治的に「馴れ合い」的に無害化されていることはよく知られているが、そうなった要因として、政策の問題だけでなく、非合法だが、強力な野党勢力としての同胞団の存在があるとの分析は面白い。ポスト・ムバーラクが現実味を帯びはじめるなか、経済状況の悪化もあり、新興の政治勢力が勃興しつつある。これらに対してもムバーラク政権は新たな対応策を求められているとの指摘も的確だろう。

(保坂 修司)

105 部会

本部会では、エスニシティとネーション、主権国家に関わる2つの報告があった。岡野内正会員の「パレスチナ問題を解く鍵としてのホロコーストとナクバー公共の場での記憶の掘り起こし・謝罪・賠償から近代的国民国家の終焉へ」、鶴見太郎会員の「シオニストはパレスチナに何をもち込んだか—パレスチナ紛争の背景としてのシオニズムの背景を再考する」である。

岡野内は、ニュージーランドの被害者、先住民に対する一種の補償制度に着目。これを、ホロコーストの被害者＝イスラエル・ユダヤ人と、ナクバの被害者＝パレスチナ・アラブとに適用する試案を示した。それぞれが「国家以前の、系譜上の親族の権利、土地を共有する親族集団としての部族的アイデンティティ」に拠る、多数のグループ「新しい部族」を形成、この部族ごとに、過去の歴史的不正について補償を要求する。こうして、ナショナル・アイデンティティ自体を解体しようというアイデアだ。

鶴見は、パレスチナへの移民運動を進めたシオニストの多数が、ロシア帝国出身者で、彼らの思想が、多民族帝国の政治文化のなかで形成された点を強調した。ロシアでは、エスニシティへの帰属意識は強いが、それは主権国家形成の追及には必ずしも結びつかない。ロシア・シオニストの多くは、強い「ユダヤ人」意識を持ちながら「ユダヤ国家」を求めようとはしなかった。このため、主権国家を求めるパレスチナ・アラブのナショナリズムを理解することができなかったのだと主張した。

(奈良本 英佑)

106 部会

106 部会は、前近代を対象とする歴史研究の発表3本によって構成されていた。小笠原弘幸(日本学術振興会)「オスマン朝におけるモンゴル観—15・16 世紀を中心に」は、オスマン朝権力に近い立場で作成された歴史文献に見えるモンゴル観をオスマン朝自身の権威づけの問題と絡めて整理・考察；村山さえ子(お茶の水女子大学)「バグダードにおけるマドラサの発展と変遷—ニザーミーヤ学院からムスタンシリーヤ学院まで」は、都市社会の総体的把握のためにマドラサを再解釈する作業に向け、着眼すべき事件やトピックを整理；阿久津正幸(早稲田大学イスラーム地域研究所)「ニザーミーヤ学院時代(5/11 世紀)の宗教諸学とイスナード概念—高等教育機関、学問的伝統と権威、およびその政治的・社会的含意をめぐって」は、やはりマドラサや知の伝達という問題群に関し、制度としてのマドラサの出現が持った意義の理解という課題を見据えて、知の伝達の個人的性格を端的に示すイスナードという制度の概念的把握を試みた。

並行して(あるいは大会全体でも)テーマ的に重なる部会が開かれていなかったこともあり、聴衆も40名ほどとなり、盛会であった。また、発表者諸氏も、明快で、かつほどほどにパフォーマンスな発表を披露し、三者三様の持ち味を見せていた。この部会が、聴衆だけでなく発表者にとっても、それぞれの研究を進めていく上で有用な機会となりえていれば良かったと思う。(森本 一夫)

107 部会

本部会は、ジェンダーに関する報告が主に組まれた。大河原報告「フランス委任統治期シリアにおける結婚登録制度と結婚性向—序説」はフランス委任統治期のシリアにおける結婚制度を、1934年の契約結婚台帳を利用して分析するものであった。まず、結婚登録制度の変遷を明らかにし、具体的に台帳や用紙の実例を紹介したのち、結婚の地理的範囲や結婚時の父親の存命率が分析された。史料は単年度の限定されたものであったが、オスマン朝時代のそれとの対比において継続する要素も多く見られるという指摘が興味深く今後の研究の進展が期待される。

嶺崎報告「イスラーム言説の役割—女性説教師の活動を通じて」は、現代エジプトの女性説教師を取り巻くイスラーム言説を分析し、そのジェンダー性を論じたものであった。カイロと近郊農村の2名の女性説教師の学習会が取り上げられ、それぞれ環境・条件は異なるものの、女性の参加者を獲得し、社会のなかで重要な役割を果たしているさまが示された。ロジックは若干異なるがいずれの場合も、女性説教師の登場により、イスラームへのアクセスのジェンダーの壁が取り払われ、女性がイスラーム言説を利用して、自らの権利を擁護しようとしている状況が明らかとなった。(近藤 信彰)

107 部会の後半のセッションでは、エジプトの女性に関連する 2 つの報告が行なわれた。最初の報告は後藤絵美氏による「イスラームの知と実践のあいだーヒジャーブ着用に関するザイナブ・アル＝ガザーリーの語りから見えるもの」で、はじめにエジプトのヴェール着用に関する先行研究が社会的分析に偏った点を指摘し、内面的宗教的側面からアプローチを行なう報告者のこれまで研究を整理した。本報告ではヴェール着用の契機を知識人らによる「宗教言説」とする自身の従来の研究をさらに一歩進め、個人の内面的経験に焦点をあてた。ザイナブ・アル＝ガザーリーの伝記を手がかりとして、ヴェール着用へ至る過程には「理論的」な「宗教言説」が影響するとともに、それとは異質の「非理論的」情緒的变化や「奇跡」などを神からのメッセージとして受けとめる個人的経験が実践への媒介となっていると論じた。

2 つめは、鳥山純子氏の「美しくなる理由ー現代カイロの若年女性教師に見る化粧」の報告であった。身体装飾の一つである化粧については、近年エジプトにおける化粧産業の躍進と消費の拡大にもかかわらず、これまで研究対象になることは少なく、また研究対象になった場合でも、結婚やセクシュアリティなどの文脈に限定されて語られ、さらに主体としての個々の女性の姿が研究から抜け落ちていると指摘した。本報告はそれを克服する研究として、報告者がカイロの私立小学校の女性教師を対象として行なった調査に基づいたものである。化粧と結婚の関係よりも、職業ステータスとして、自らに自信をもたらすものとして、さらに趣味として化粧を捉えていることなどが調査結果として示された。

質疑応答にもあったように「言説」の意味を検討する必要性や、分析対象をさらに広げ考察を精緻化させることは両報告に当てはまるが、ともにオリジナルで意欲的な研究であり、さらなる展開が期待される。 (池田 美佐子)

201 部会

加藤博氏・岩崎えり奈氏の「あるエジプト・オアシス村の生成」は、エジプト西部沙漠のオアシス村ラシュダを対象に、統計資料、戸別訪問・聞き取り調査、詳細地図、公文書、私家文書など、実に多様な手法を駆使して、村の成立・拡大過程という歴史的局面から、住宅 1 戸 1 戸レベルの現在の生活実態にいたるまで、一つの村の社会像をミクロレベルの実証性を保持しつつ総合的に明らかにする報告であった。多面的なデータをデジタル画面上で再構成し、視覚的にわかりやすく提示することにも成功していた。オアシス村という、一見孤立したように見える社会が、周辺地域と密接な関係を持っていたこと、その就業・教育の形態が距離的に近いナイル河谷農村部よりもむしろ遠いデルタ地帯の都市部に近いこと、村内の住宅地拡大の中で拡大家族は分散して居住する傾向にあることなど、エジプト全体のマクロを見通すうえで有益な特徴が次々と浮き彫りにされた。

関佳奈子氏の「19世紀末～20世紀初頭のメリーリヤにおける異教徒の混住—1887年と1904年の住民基本台帳を素材として」は、モロッコの地中海沿岸部に位置しつつ、スペインの飛び地領土となっているメリーリヤについて、現地文書館で得られた住民基本台帳の情報を分析した報告であった。報告者は移民問題の舞台として同都市に注目し、今後その問題を総合的に解明するための基礎作業として本報告を位置づけていた。流刑地である城塞都市が1874年に居住制限を撤廃されて以降、調査対象の17年間を通じて、人口の拡大(1,470人から10,929人へ)と宗教的複合化(圧倒的多数がキリスト教徒で残りがユダヤ教徒ながら、ムスリムが若干加わり始める)、人々の職業構成の多様化などが明らかにされた。移住先に関する情報はどうしたら得られるのか、住民基本台帳がカバーした人口と実際の都市人口との重なり合いについてなど、質疑は多岐にわたった。今後の研究の進展が期待される。(黒木 英充)

JAMES-KAMES 特設セッション JAMES-KAMES Special Session

中東学会年次大会では毎年、AFMA 加盟学会として韓国中東学会から会長を招聘し、研究報告をお願いしているが、昨年からは KAMES・JAMES 合同セッションという形で、JAMES 会員による英語報告を含めたパネルが組まれている。今年は韓国中東学会会長の Hee-Soo Lee 氏が多忙につき参加できなかったが、代行として事務局長の Dal Seung Yu 氏が来日、「イランにおける政治文化についての性格研究」との報告題で発表を行った。(酒井 啓子)

202 部会 JAMES-KAMES 特設セッション I / セッション II Part 1

The first section of the KAMES-JAMES panel featured two presenters, Dal Seung Yu of Hankuk University of Foreign Studies and Arezoo Fakhrejehani of Tokyo University of Foreign Studies. The pairing of these two presentations was fortuitous in that both of them discussed aspects of Iranian studies using English. About 25 JAMES members attended the event and asked pertinent questions of both presenters. Professor Yu, our Korean guest, spoke on the subject of “A Study of the Character of Iranian Political Culture.” Such a broad title revealed few advance clues about what is real topic would be. As it turned out, his main subject revolved around what one of my old professors used to describe as “Perso-Islamic Kingship.” In other words, he discussed pre-Islamic notions of kingship and how these impacted contemporary Iranian thought as it relates to the concept of the Imam. Some of the audience questioned this approach by asking if Iranian political culture could be defined so simply as its thought about patterns of political authority and religion. Professor Yu explained that his own current research focused on those aspects. Arezoo Fakhrejehani, the second presenter, revealed some of the results of her field research in the Canadian cities of Vancouver and Toronto. Since her presentation was accompanied by

many pictures of Iranian communities in Canada it was rather engaging to observe. She focused some portion of her talk on different Iranian minorities and the differences in their perspective toward Canadian society and other matters. The research seemed to be in a rather early stage, and the precise questions that she wished to address remained to be clearly defined. Given time and refinement, however, Fakhrejehani seemed to be onto a potentially rich and largely unexplored academic topic.

Elmostafa Rezrazi presented on the theme of “Japanese Diplomacy in the Middle East after the US Invasion of Iraq.” It came in a separate section because he had to return to Tokyo early for an important appointment related to TICAD IV. The most notable feature of his presentation was his description of different schools of thought within the Middle East Studies community of Japan. In Professor Rezrazi’s view, JAMES is an influential body of scholars who have a real impact on Japanese foreign policy through the reports that they write for policymakers. In particular, Rezrazi highlighted the contributions of the ‘Itagaki School,’ which he feels has played a significant role in Japan’s foreign policy since at least 1990. (Michael Penn)

203 部会 (企画セッションⅡ)

企画セッションⅡは、「中東政治体制研究における一般理論と事例研究の調和と相克」と題したシンポジウム形式で行われた。まず企画者である浜中新吾氏による趣旨説明が行われ、中東諸国の政治体制の変動要因を比較政治学という一般理論を用いて説明することの意義が指摘された。すなわち、地域固有の説明体系に拘泥するのではなく、それと一般理論との橋渡しを試みることで、理論面での貢献および他地域を専門にする研究者との議論の活性化を期待するものである。続けて、同氏による「政治体制の安定と変動に関する理論と事例研究の邂逅」と題した報告が行われ、権威主義体制が継続するエジプトと民主主義体制のアノマリー(変則)となったイスラエルとトルコ(軍部と政治の密接な関係にもかかわらず文民統制が機能しているという変則)を比較することで、それぞれの政治体制の変動要因についての丁寧な分析がなされた。特に「動学的一般均衡論」が提起する変数に着目し分析が進められていったが、この作業を行うことで、それぞれの事例のあいだの差異を浮き彫りにしただけではなく、他地域との比較が可能になると結論づけられた。

2 番手の報告は、福富満久氏による「選挙、民主化、民主主義の定着—中東・北アフリカにおける実態と独裁の均衡」であった。浜中氏の報告が一般理論と計量的実証分析に基づくものであったのに対し、福富氏はいわばオーソドックスな比較政治学の研究である。同氏は、なぜ中東諸国だけが一定の政治的「自由化」が進んでも民主化に到達しないのか、という問題意識から、チュニジア、アルジェリア、エジプト、シリア、モロッコ、ヨルダン、湾岸諸国を比較検討していった。さし

あたり、選挙の制度および実施状況に着目することで、その「自由化」の内実が明らかにされた。その上で、これらの諸国における権威主義体制の持続要因を国家の側だけに求めるのではなく、社会との相互の関係性および国外アクターの役割にも目配りした分析が行われた。中東諸国の事例を通して提唱されたこうした多角的な研究手法は、既存の一般理論の精緻化に貢献するものと捉えることができよう。

3番手の今井真士氏は、「協定と権威主義体制の持続—比較歴史社会科学アプローチの観点からエジプトとその他中東地域の事例を用いて」と題した研究報告を行った。同氏は、アラブ諸国は民主化の正否というものさしで評価・研究されがちであったことを指摘した上で、権威主義体制の持続という現実の政治を説明できる理論的枠組みの構築が必要であるとした。具体的にはエジプトとチュニジアを事例として取りあげ、比較歴史社会科学アプローチ(CHSS)を用いながら両国で在職者と反対勢力間でしばしば結ばれてきた「協定」を再検討した。「協定が作成されてきたにもかかわらず民主化が進まないのはなぜか」という問いに答えるために、協定の作成を「重大局面」として捉え直した新たな理論的枠組みの提唱を行った。

以上3つの研究報告の後には、シンポジウム形式ということでやや長めの質疑および討論時間が設けられた。フロアからの質問は、分析枠組みに対してよりも、トルコの民主主義体制は定着していると言えるのか、といった個別の事例に引きつけられたものが目立った。地域固有性の叙述と一般理論による説明・評価とのあいだの溝、あるいは事例研究と理論研究とのあいだのアポリアが改めて浮き彫りにされたようにも思えるが、これこそが本セッションが一貫して問題視してきたことであり、さらに言えば、これからの中東政治研究の取り組むべき大きな課題の1つであろう。(末近 浩太)

204 部会

溝渕正季氏の「レバノン・ヒズブッラーの起源と誕生に関する政治社会学的分析—導入と予備的考察」は、ヒズブッラーの起源と誕生を説明する際に社会運動論の理論的枠組みがいかに有効でありうるかについて議論をした上で、動因への潜勢力としてのシーア派共同体の構築においてムーサー・サドルが果たした役割を論じた。会場からは、発表者が今後フィールド調査を行い論文執筆に取り組む際に、シーア派共同体およびレバノンが置かれていたより大きな政治環境についても、説明の枠組みに取り組む必要性などが指摘された。

山尾大氏の「1980年代のイラク・イスラーム革命思想の変容—亡命期イスラーム政党をめぐる考察」は、イラン亡命中のイラクのシーア派イスラーム政党の分断・統合と再分裂の過程とその背景、さらに同時期におけるイデオロギー面における連続性の意味合いについて論じた。報告はダアワ党がいかに変化して行ったかを資料に即して巧みに分析したものであったが、会場からは、宗派を超えた統合

の趣旨についての質問や、統合と再分裂の説明においてイラン国家の果たした役割をより密接に組み込む必要性の指摘がなされた。

黒田賢治氏の「ポスト・ホメイニー期におけるハウザ制度と法学権威—コムにおける現地調査を中心に」は、2007年の春と夏に報告者がコムの複数の法学権威事務所で行ったフィールド調査に基づき、ポスト・ホメイニー期における法学権威の役割とその変化を一般信徒との関係においてを論じた。会場からは、調査結果の解釈や意味づけに関する質疑、さらにコムのシーア派法学界と革命後イランの宗教国家のかかわりについても議論する必要性の指摘がなされた。

3 報告とも、シーア派イスラームの現代的展開について実証的に研究した興味深いものであったため、多数の聴衆を集め、その結果、充実した部会をもつことができた。(松永 泰行)

205 部会

錦田愛子氏の報告「レバノンのパレスチナ難民に関する法的地位の動向—『7つの村』をめぐる国籍付与問題」は、レバノンにおけるパレスチナ難民の法的な地位を、イスラエルとレバノンの間で帰属が問題となった7つの村出身のシーア派難民で、1994年の布告に基づき新たに国籍が付与された難民の事例を中心に検討したものだ。レバノン政府の国籍付与政策は宗派主義と密接に関係していること、レバノン国籍を取得したパレスチナ難民自身の意識などが報告され、同じ難民でも意識に差異があることが指摘された。質疑応答でも、国籍を取らなかった難民の意識やヨルダン在住パレスチナ難民との比較などが議論された。

飛奈裕美氏の報告「エルサレムにおけるイスラエル占領政策とパレスチナ人の戦略—住居建設の事例から」は、東エルサレムにおけるイスラエルの住宅政策を占領政策の視点から検討するとともに、パレスチナ人が「住み続ける」ためにどのような戦術を取っているかが取り上げられた。特にイスラエル国内法が適用され「占領地ではない」とされている東エルサレムにおいて、パレスチナ人の住宅建設がいかにイスラエルによって「違法建設」とされ取り壊しなどの対象になっているかの実態が報告された。質疑応答では、イスラエル国籍をとっているパレスチナ人(いわゆる「イスラエル・アラブ人」)の支援や、ヨルダン川西岸における住宅破壊や土地接収との比較などが議論された。(立山 良司)

206 部会

伊藤寛了報告「トルコ共和国初期における宗教保守層の出現—イノニユの時代(1938-1950)における『イスラームの復興』の一形態として」では、これまでトルコのイスラームに関する研究においては、ヌルスィーなど「イスラーム主義者」のみが対象とされることが多く、ムスリム大衆のイスラームが扱われてこなかったとの問題意識から、「宗教保守層」を代表するファーズル・クサキュレッキの主宰する『ビ

ュニック・ドウ』誌の論調が紹介された。そこでは、西欧的価値観の浸透に対して道徳の崩壊を嘆き、イスラーム精神にのっとった道徳主義・民族主義を強調する立場が強調されていたようである。ただ、フロアからの発言にもあったように、やはり「宗教保守層」といった聞きなれない概念の明確な説明が必要であったと思われる。

山下王世報告「コジャテペ・モスク建設の文化的背景—『アヤソフィア論争』の影響」では、アンカラのコジャテペ・モスク建設をめぐる政治的推移が紹介された。筆者もかつて、このモスクの最初の「プラン」の絵を見て、そのモダンさに感嘆した記憶があるが、結局この「プラン」は実現することなく、16世紀イスタンブルの伝統的モスクの「プラン」(東京の代々木上原にあるモスクと同じ)が採用された。報告では、最初の「プラン」の設計を行った建築家ダロカイとこの「プラン」に反対する保守系新聞『ザマン』誌との抗争に焦点が置かれたが、表題にあった「アヤソフィア論争」や当時の時代的背景に関する説明がやや不十分であった。しかし、これは報告者が建築史を専門とされていることからするやむをえぬことであった。

宇野陽子報告「トルコ大国民議会第一議会における野党と外交—ローザンヌ条約論争を中心に」は、トルコ大国民議会第一議会における、ムスタファ・ケマルを首班とする「第一グループ」と「第二グループ」との間のローザンヌ条約批准をめぐる抗争を扱ったものである。これまでローザンヌ条約はイスメト・イノニユの巧みな外交的「勝利」と位置づけられることが多かったが、これを国内の政治情勢との関連から論じられたことが筆者には新鮮であった。とりわけ、現代にも大きく影を落としている「モースル問題」に対する姿勢が戦争の再開に対する危機感の有無にあったという指摘は重要であろう。論旨はさらに多岐にわたって興味深かったが、「レジュメ」が簡単にすぎたために、このテーマを聞きなれない出席者にはわかりにくい面があったようである。(永田 雄三)

207 部会

この部会で予定されていた3つの発表は現代のGCC諸国を取り扱ったものであり、参加者の中にもGCC諸国を研究の対象としている研究者が多く見られた。1番目の発表はGCC諸国の経済をテーマとした大工原桂氏の「オイルブームに沸く中東産油国経済の構造変動」では、はじめに、石油収入に依存したGCC諸国では福祉国家化と工業化が進められており、その中で大規模な投資プロジェクトが進行中であることが指摘された。続いて、商業・貿易、金融、観光・不動産開発などを中心としたサービス特化型の経済開発を進めているドバイ首長国の事例と、工業化・産業多角化を進めているサウジアラビアの事例が報告された。2番目の発表「アラブ世界における優秀な人材の流失と獲得—その現状と将来の展望」でブカーリ・イサム氏は湾岸地域における人の移動に関する新しい傾向を分析する予定であったが、残念ながら中止になった。今後、何らかの形で発表されることを期待したい。

3 番目の和氣太司氏による報告「湾岸諸国における高等教育の発展とグローバル化」では、サウジアラビアとドバイの事例を引きながら、GCC 諸国では大学などの高等教育の整備が進んでおり、その中で高等教育の質の確保が大きな課題になってきていることが指摘され、また、ドバイにおける「知の拠点化」など教育のグローバル化への対応が見られることと、サウジアラビアの「アブドゥラー国王科学技術大学」の設立など大学で研究の役割が強まっていることが報告された。今回の大会では、他の部会も含め全体では GCC 諸国に関する研究発表が数件行なわれ、GCC 諸国を対象とする研究が増え、テーマも政治、経済、宗教、教育など幅を広げていることが示された。今後、研究がいつそう深まっていくことを期待したい。(福田 安志)

302 部会 JAMES-KAMES 特設セッション II Part 2

JAMES-KAMES 特設セッション II Part 2 では、新月研究所所長の Michael Penn 氏による“Japanese Public Reactions to Terrorism in the United States in September 2001”、およびパンオリエント・ニュース社(PanOrient News)の Khaldon Azhari 氏による“The Japanese Media and its Coverage of Middle Eastern Wars”の 2 報告が行われた。ペン氏は日本の世論動向と政策決定の乖離について指摘し、またアズハリ氏は米軍によるアフガニスタン・イラク攻撃に対する日本のメディアの報道振りについて分析、その問題点を指摘した。フロアからは、栗田会員が、最近の自衛隊イラク駐留に対して名古屋高裁が違憲判決を下した点などを、日本メディアを見る上でどうとらえているのか、といった質問を行うなど、活発な議論がなされた。

昨年から開始した英語でのパネルの試みは、韓国中東学会との研究交流という意味で重要だが、日本語を母語としない会員にとって学会報告の機会を与える意味でも、たいへん貴重な試みだった。参加者には学生会員の姿も見られ、今後英語での報告パネルを継続していくことは国際交流のみならず研究の国際化のためにも意義が大きいと実感したパネルであった。(酒井 啓子)

303 部会

北澤報告「第 15 期ヨルダン下院議員選挙の特徴について」では 2007 年 11 月に実施されたヨルダン下院選挙の特徴を論じたものであった。とりわけ、イスラーム系政党の議席減、女性の政治参加の増大、そして無所属議席の拡大という観点から分析された。と同時にヨルダンの世論調査の結果も選挙結果と対比的に報告された。非常におもしろいのが、6 割近い人が政党は市民より党首の利益のために活動しているとみなし、政党の役割は「権力を取らずに活動する政治団体」であるべきだと認識しており、既存政党に期待していないという結果が導き出されている点である。立憲王制の問題が凶らずも浮き彫りにされているように思われたが、にもかかわらず、ヨルダン国民は米国、イスラエル、レバノンに次いでヨルダンの民主制を評価しているという結果が出ているのである。

青山・高岡報告「シリア・アラブ共和国での全国世論調査(2007年)—調査結果に見るシリア国民の政治意識」では、ニーズ対応型地域研究推進事業「アジアのなかの中東—経済と法を中心に」の一環としてシリアのシャルク国際研究センターと協力して行なった世論調査の結果の一端を披露したものであった。権威主義体制の下で人々はどんな政治意識をもっているのかという問題設定に対して、レバノンではヒズブッラーなどへの、パレスチナではハマースへの支持の高さ、中東諸国への軍事干渉・占領をやめるべき国に米国が多く挙げられている点、イランへの高い評価、米国、イスラエル、サウジアラビア、エジプトへの低い評価などの結果に見られるように、「案外！」(報告者の表現)、国民の対外意識がシリアの外交政策に反映されているという指摘はなるほどと思われた。また、湾岸地域への意識としては就労や高収入などの実利的な動機が大半を占めるとか、さらには欧米諸国への渡航希望動機は親近感の点で湾岸よりも高いなどという結果は、そうだろうなどは思いつつ、数字として示されると納得してしまう。それこそ、案外、調査結果と実態とのずれを少しでも埋めるシリア・イメージの提供という観点からは今後も続けられる必要のある有益なプロジェクトだと確信した。部会全体の議論は盛り上がったが、時間通りに部会を終了できたことは司会者としては職務達成という気分になるものである。参加者に感謝申し上げる。(臼杵 陽)

304 部会

丸山大介氏による発表「スンナ派神学のワリー論」では、じゅうらい主としてスーフィズムの中で語られていたワリーについて、スンナ派神学における見解を、多様な資料をもとに紹介したものである。スーフィズム以外の文脈でワリーは述べられていないのかという疑問を出発点として、スンナ派各学派のワリー論を分析した。とくにカラーマとの関係も論じ、スーフィズムにおいて、他者に恩恵をもたらす聖者として認識されているワリーについて、スンナ派神学においてはワリー本人が信仰正しく実践する聖者として理解されていると結論づけた。

茂木明石氏の「イマーム・シャーフィイーのミフナ(試練)—知識、血統と聖性」では、シャーフィイーのミフナ事件について、一連のマナーキブ史料の詳細な分析により、事件が彼の聖性を証明するための重要なものであったことを紹介したものである。ヤフヤーの反乱に加担した嫌疑をかけられ、カリフ、ハールーン・アッラシードの審問を受けたシャーフィイーが、そこでの弁明により赦免されたことについて、その知識や血統・聖性が、ミフナ(試練)というネガティブな事件によりむしろ高められたと読み解く非常に興味深い研究発表であった。(岡本久美子)

305 部会

305部会では、オスマン近代史にかかわる2つの発表があった。佐々木紳氏の「オスマン帝国と普仏戦争—情勢分析からパン・イスラーム主義へ」と題する発表は、

1870年代にオスマン帝国で高揚したパン・イスラーム主義の背景を当時の国際情勢に対するオスマン知識人の認識の変化のなかに探ろうとするもの。氏によれば、オスマン知識人による普仏戦争の情報分析がロシアのパン・スラブ主義への警戒感と親ドイツ的な論調を惹起し、さらには、パン・イスラーム主義を掲げてパン・ゲルマン主義と連携し、パン・スラブ主義に対抗すべしとの主張に結びついていったという。

長谷部圭彦氏の「近代オスマン帝国における諮問機関—国家評議会教育局を例に」は、近代オスマン帝国で設置されたさまざまな諮問機関のうち教育に関わる部局を取り上げて、構成員の出自や、案件とその処理方法などを諸史料に基づいて分析することで、諮問機関の実相を浮かび上がらせようとするもの。教育局の審議には各宗教共同体の代表者が参加していたことや、案件の多くが教職員の俸給などに関する「日常的」なものであったことなどが指摘された。

いずれも若手研究者による「生きのいい」発表であり、日本においてもオスマン帝国の「長い19世紀」に関する研究の幅が着実に広がってきたことを実感させる部会であった。(山口 昭彦)

306 部会

幸加木文氏の発表「現代トルコにおける『イスラーム派』の世俗主義思想—フェトウッラー・ギュレンの位置付け」は、世俗主義の解釈をめぐるフェトウッラー・ギュレンの言説を、同じく「イスラーム派」陣営に属するとみなされる現首相タイイップ・エルドアンのと比較しながら分析したもので、両者の言説の間には種々の類似点が認められる一方、ギュレンは一人であるので、その言説はエルドアン首相のそれと比較すると政治性は強くないと結論した。確かにギュレンは政治家ではないが、その宗教的指導性と社会的影響力の大きさを考えたとき、単純に一人といいきれないことも事実で、彼の発言の政治性を十分に意識する必要がある。いずれにせよ、今日「世俗派」と「イスラーム派」とに分類される場合の「イスラーム派」の思想的多様性を整理する上でも、ギュレンという人物に着目し、彼の言説をその政治的・社会的背景を読み解きながら分析することの必要と意義を改めて実感した。

若松大樹氏の発表「トルコ共和国におけるアレヴィー集落の社会変化に関する一考察—キュタフヤ県の事例を中心に」は、近年指摘されているアレヴィーのスニー化とみられる現象が、氏の調査したキュタフヤ県のフィールドでもやはり確認されたが、それは宗務庁の「教化」の影響よりも、むしろヌルジュヤスレイマンジュによる活動の影響によるものであることを報告したものであった。さらに氏は、「スニー化」の過程においてもアレヴィー・コミュニティの宗教指導者デデの権威はむしろ強化されている状況があることから、従来「アレヴィーのスニー化」と説明されてきた現象を単純に同化と解釈するのではなく、アレヴィ

一の自発的・積極的な自己形成の一局面としてとらえるべきものであるとした。おそらく、外部から「同化」と観察される状況も、当事者にとっては「自己形成」なのであろう。とはいえ、アレヴィーが礼拝、断食、スカーフ(イスラーム服)着用などを実践し、ヌルジュのサークルなどに参加し始めているという事実は、やはり重いものがある。(粕谷 元)

307 部会

307 部会では、不労所得とリスクを排し、イスラーム的公正と経済生活の安定を目指すイスラーム金融の理論的・実践的課題に関わる報告が2本行われた。

まず、長岡慎介会員による「現代イスラーム金融における異時点間取引をめぐる諸問題—その理論的含意と実践へのインパクト」では、融資契約やインフレ下において生じる異時点間取引における価格差をイスラーム金融理論ではどのように理解すべきか、という問題が提示され、貨幣財と実物財を区分し、機会費用概念と使用価値概念を適用することで理論的整理が可能である、との見解が示された。90年代とそれ以後のイスラーム債券の性格の違いの有無、イスラーム型デリバティブを貨幣財と実物財の視点から整理できるか、貨幣が実物財(貴金属鑄貨)として存在する場合に議論はどのようになるのか、など、報告の論証をめぐる質疑が交わされた。続く上山一会員による「イスラーム金融・銀行研究の動向—イスラーム銀行のリスク分析を中心に」では、在来型・非イスラーム金融機関を対象に積み上げられてきた金融論・銀行論の視点から、イスラーム銀行業の特徴と課題がまとめられた。報告を通じて広範囲にわたり論点が提示されたことは、この問題に対する今後の理解にとって有益であったが、その反面、多数の論点に対して、フロア参加者の間には質問しあぐねる気配も感じられた。この点が惜まれる。質問では、イスラーム金融機関が採用するマークアップ率が金利に「連動」する、という場合の「連動」の意味は何か、また、国ごとにイスラーム銀行の規制方法が異なる意味は何か、が問われた。(水島 多喜男)

【付設託児所について】

付設託児所は大会の開催される2日間にわたって開設される予定でしたが、1日目については利用希望者がいなかったため2日目のみとなりました。利用(児童)数はこのべ6名、そのうち2名は1歳未満の乳児でした。学齢期の児童と乳児が混在したため保育士は2名確保しました。託児所となる教室には乳児用のカーペット・スペースやお絵かき・読書のコーナーを設けるなどし、お子さんたちがリラックスして過ごせるように工夫しました。前日には、教室をぴかぴかに磨き上げてくれた千葉大の学生スタッフ諸君に心より感謝いたします!

研究発表の教室と同じ棟に託児所を設置し保護者のみなさんが行き来しやすい

ようにしたところ、休み時間には保護者だけではなくお子さんたちに会いに友人・知人も訪れて賑やかでした。また大きいお子さんたちが赤ちゃんをあやすなどして協力してくれ、和気あいあいとした雰囲気になりました。

今回お子さんを預けられた保護者の方々がたの中には、自ら研究発表をされた方や、「託児所のおかげで数年ぶりに学会に参加できました」とおっしゃる方もおり、潜在的な託児所ニーズを強く感じました。ちなみに今回の運営経費は、学会事務局にプールされている託児所用の基金(繰越金・寄付金など)から補助を出し、利用者の方々にはお子さん一人につき時間当たり 500 円をご負担いただきました(ごきょうだいの場合には割引)。(岩崎 葉子)

託児所会計報告

収入		支出	
繰越金	32,015	保育士派遣	39,844
寄付金(08年度)	51,420	手数料	315
利用料	11,125	ラグ	3,980
		タオル	312
		菓子	210
		水等飲料	1,360
		次年度繰越金	48,539
計	94,560	計	94,560
		収支差引残高	0

(単位：円)

【第24回年次大会決算報告】

会費等の事前振込制も3年目を迎えたが、事前登録率は約6割、懇親会費事前納入率は約7割で、ほぼ例年通りであった。これは予想していたので、収入はおおよそ見込み通りであったが、支出が見込みを大幅に上回り、大きな赤字(収入欄「補填」の項目)を出してしまった。年次大会基金から補填されるとはいえ、高額の赤字を出したことは本大会実行委員会の運営能力のなさによるものであり、お詫び申し上げたい。本大会は、初日のシンポジウムを千葉大学大学院人文社会科学研究科と共催としたことによって会場使用料が無料となったため、本来であれば例年より余裕をもって予算を組めたはずであるが、実際には他の支出がその節約分を超過することになった。当初の見込みを超えて例年の支出額を大きく上回ったのは、アルバイト謝金の項目である。これは、事前及び当日の業務を実行委員間で効果的に割り振ることができず、各種作業をほとんどアルバイトに頼らざるを得なかったこと(学外や非会員の実行委員が多く連携が難しかったことがその

収入		支出	
大会運営費(学会費より)	300,000	印刷費	180,570
参加費(事前)(161名)	161,000	送料	71,810
参加費(当日)(103名)	103,000	事務用品	16,772
懇親会費(正)(107名)	535,000	懇親会費	630,000
懇親会費(学生)(40名)	160,000	弁当代	121,800
弁当代(74名)	74,000	講師謝礼	30,000
錯誤振込	26,000	アルバイト謝金	357,120
書店寄付	20,000	バイト慰労費	50,000
年次大会特別基金より補填	151,349	デザイン料(ポスター等)	30,000
		錯誤振込返金	26,000
		弁当代返金	3,000
		振込手数料	420
		茶菓	12,857
計	1,530,349	計	1,530,349
		収支差引残高	0

(単位：円)

主な要因である)、プロジェクト使用者が多く、各部会にアルバイトを2名配置せざるを得なかったこと、などが原因である。また、今大会ではシンポジウムのポスターを制作した。これには(発送費や発送作業のアルバイト代も含めて)相応の費用がかかったが、反響も多く、意味のある出費だったと思う。なお、弁当代返金とは、事前振込者に弁当券を配布し忘れるという実行委員会のミスがあったため、該当者に代金を返金したものである。最後に、本実行委員会はこの種の催しについてほとんど経験がなく、マニュアルなしに運営することは多大な困難をともなった。疑問が生じるたびに中東学会の「慣行」や「合意」を聞いて回るという方法には限界があると感じた。(第24回年次大会実行委員会 秋葉 淳)

【大会を終えて】

今年度大会の参加者は266名、全部で20のセッションが七会場で開催され、研究発表は国際セッションも含めれば55本(報告者58名)にのぼる、大きな規模の大会であった。初日の公開シンポ「パレスチナ問題と日本社会」は、今年がナクバ60周年という節目の年だったこともあり、予想以上の盛会であった。シンポと並行して関連のパネル展示や書籍類の紹介・販売が行なわれたこともあって、多くの市民にパレスチナ問題について考える機会を提供できたのではないかと思う。懇

親会は、和やかであると同時に、スピーチの中で学術振興会カイロ事務所問題をめぐる動きが報告されるなど、有意義な内容であった。二日目の研究発表では、今年度からの新しい試みとして「企画セッション」があり、また、韓国中東学会からのゲストを迎えての国際セッションも組織された。NHK 国際放送(アラビア語放送)による取材があり、中東学会の活動が注目されていることが実感された。

反面、反省点も多い。研究発表会場となる校舎の耐震化工事が終了するまで、改修後の設備の詳細が判明しなかったため、大会本番になって教室変更を通知する形となってしまった。また、大学構内の掲示が不備であったため、当該校舎まで到達するのに苦労された方も多い。お弁当の渡し忘れという事態も発生してしまった。

これらはすべて基本的には、千葉大学内には中東学会会員が3名しかおらず、かつ、年の功から実行委員長に納まった栗田に全く事務能力がなかった、という事情に起因している。そんな悪条件の中でも何とか大会を終えることができたのは、秋葉・千代崎両会員の獅子奮迅の働き、学外から参加頂いた実行委員諸氏の有能さ、学内で協力頂いた(非会員の)実行委員や、院生・学生の献身的努力のおかげである。この場を借りてお詫びとお礼を述べたい。(栗田 禎子)

『日本中東学会年報』編集委員会報告

『日本中東学会年報(AJAMES)』編集委員会より、ご報告いたします。

1. 23-2号刊行のお知らせ

すでにお手元に届いていることと思いますが、23-2号が2008年3月に刊行になりました。論文(英文1本、和文6本)のほか、臼杵陽会員とりまとめによる特集“Japan and the Middle East before World War II”(英文5本)、書評1本、博士論文要旨1本が掲載されています。23-1号、23-2号の欧文率(外国語による論文等の割合)は合計で59.2%となっています。AJAMESは多言語による欧文誌を目指しており、また科学研究費(研究成果公開促進費)の補助を受けている関係で一定の欧文率の達成が求められています。引き続き、特に外国語(欧米諸語、中東諸語)での投稿をお待ちしております。

2. 本年度の編集委員会の体制

2年間にわたって編集委員長を務められた林佳世子前編集委員長が退任され、かわって山口が編集委員長を務めることになりました。同時に、副編集委員長には、山口にかわり青山弘之委員が就任いたしました。また、長年にわたりAJAMES編集にご協力いただいた鷹木恵子委員にかわり、縄田浩志委員に編集委員をお願いすることになりました。本年度の編集委員会の構成は次頁の通りです。

編集委員長： 山口昭彦
副編集委員長： 青山弘之
国内編集委員： 池田美佐子、岡真理、加藤博、竹下政孝、縄田浩志、羽田正、林佳世子、松本弘、水島多喜男、村上薫、山中由里子

海外委員としては、Dale F. Eickelman、R. Humphreys、Abdul Karim Rafeq の 3 氏に委嘱しています。

3. 本年度の刊行予定

本年度 24 号の刊行は、7 月 (24-1 号) と来年 1 月 (24-2 号) を予定しています。24-2 号への投稿は去る 6 月 20 日をもって締め切りました。各ジャンルに合計 16 本の投稿をいただきました。次の 25-1 号の締め切りは本年 12 月 20 日です。会員のみなさまの投稿をお待ちしております。

4. 特集企画の募集

AJAMES ではこれまでも特定のテーマのもとに英文の論考を集めた特集を組んできました。特集については、取りまとめの方が会員であれば、他の寄稿者が会員かどうかは問いません。学会やシンポジウムでのパネルを世界に向けて論文として発信することをお考えの方は、ぜひお寄せください。もちろん、まったくの未発表原稿をお寄せいただいてもかまいません。お待ちしております。

5. 博士論文要旨

AJAMES では、会員による中東地域を対象とした博士論文の要旨を掲載しています。最近博士論文を提出された会員の方は、その英文要旨をぜひご提供ください。博士論文要旨の掲載を通じて、日本の中東研究の最先端を世界に発信できればと願っています。

6. 日本中東学会奨励賞

日本中東学会では、「日本中東学会奨励賞」をもうけて、若手会員 (刊行時に 40 歳以下) による外国語での AJAMES 投稿論文のなかでもとくに優れたものを 2 年ごとに表彰しています。できるだけ多くの候補論文のなかから受賞論文を選出できればと考えておりますので、該当する資格をお持ちの方は、ぜひとも外国語での投稿論文をお寄せください。なお、奨励賞規程は、ニューズレター 109 号に掲載されていますので、ご参照ください。

7. 国立情報学研究所況 CiNii

すでにニューズレター 111 号でお知らせしたとおり、国立情報学研究所の提供する論文情報ナビゲータ CiNii で、AJAMES 掲載論文のほとんどが閲覧できるようになりました。日本中東学会会員は、国立情報学研究所に日本中東学会会員で

あることを申告し、個人 ID を取得すれば、無料で利用できます。もともと国立情報学研究所と定額契約している研究機関から利用すれば、個人 ID は不要です。

Google からのアクセスも可能ですが、詳しくはニューズレター111号、33ページを参照してください。

2007年度、AJAMES 掲載論文の本文を閲覧した件数は、1851 に達しています。今年度も昨年度を上回る早さで閲覧件数が増えており、学会誌としての AJAMES への関心がますます拡大していることを示しているものと思われます。

8. 編集委員会への連絡用メール・アドレス

投稿ならびに AJAMES についての諸種のご連絡には、次のアドレスを利用しています。

ajames-editor@tufs.ac.jp

どうぞよろしくお願ひいたします。

(山口 昭彦)

アジア中東学会連盟 AFMA 大会のお知らせ

4年に1回開催される「アジア中東学会連盟 Asian Federation of Middle East Studies Associations」の大会が、今年、モンゴルのウランバートルで開催されます。大会の総合テーマは“*The current situation and future perspective of relations between Middle East and North east Asia*”です。

日時：2008年9月5日・6日

場所：ウランバートル(詳細未定)

AFMAの研究大会ですから、できるだけ多くの日本中東学会会員が参加されることを期待いたします。ただし、報告を希望される方を含めて、滞在費を含む渡航費用などは自己負担となります。テーマについては、必ずしも厳格に上記テーマに沿ったものでなくとも問題はないと思います。北東アジアの中東研究者と交流を深める貴重な機会ですから、ふるってご参加ください。

発表希望者は、以下の2点について電子メールで酒井啓子(学会国際交流委員長)までご連絡ください。

kei1040051@gmail.com

- (1) 報告希望の有無・およびテーマ……7月24日まで(名前、所属と肩書き、報告仮題を英文にて明記のこと)
- (2) 報告要旨……8月10日まで(字数制限は特に指定されていませんが、100-200words程度が望ましいと思われます) (酒井 啓子)

日本中東学会第 14 回公開講演会のお知らせ 「イスラームから多文化共生を考える」

講演会では、日本における多文化共生の現状と課題を、日本に暮らす外国人のムスリムの視点からだけでなく、日本人のムスリムの視点からも考えます。

会場は、現存する日本最古のモスクを有する神戸に設定しました。幸い科研費が採択されましたので、JR 三ノ宮駅より徒歩 3 分の神戸国際会館を予約することができました。

遠い世界、異質な人々の話として語られることの多い中東やイスラームに関する事柄を、受講者に、身近な地域社会の事柄として捉えなおしてもらう機会を提供することを目指します。日本における多文化共生に関心を持つ方々に広く参加を呼びかけていただければ幸いです。



写真:神戸モスクへの道標

日時：2008 年 10 月 25 日(土)午後

会場：神戸国際会館

基調講演：「仏教からみたイスラーム」(講師：森本公誠)

パネル：「イスラームから多文化共生を考える」

(パネリスト：店田廣文、貞好康志、河田尚子)

(桜井 啓子)

日本学術振興会カイロ研究連絡センター —存続から発展へ—

長い経過は省略するが、昨年 12 月 24 日、政府閣議は独立行政法人の見直し要綱を閣議決定した。その中の日本学術振興会に関する「組織見直し」の項で、カイロ、ナイロビ研究連絡センターだけが取り上げられ、「効率的な業務運営の観点から……廃止など見直しを検討する」と記述された。まさに“トカゲの尻尾切り”だと思われた。その直後から、エジプト政府高等教育・科学研究省、駐日大使館、日本中東学会が、カイロ・センターの存続を求めて、文科省、学振に強力に働きかけた。2008 年が両国政府取り決めによる「日本・エジプト科学技術協力年」で、その最初の参加行事がヘルワン大学での学振アジア・アフリカ学術基盤形成事業による国際セミナー(京都工芸繊維大学が中心)だったことや、今年中に学振カイロ・センターの支援・調整で 4 つの国際シンポジウムを開催する計画であることなどが、エジプト側を敏感に動かしたと思う。その後、文科省の現地調査もあり、文科省も存続に前向きになったと私は理解している。

また、学振本部は、学振フェロー(博士号保有研究者の日本留学・滞在研究制度)OB 約 100 人の同窓会正式発足(2008 年 4 月)などもあり、カイロ・センターの役割を再認識し、存続のみならず、中東地域のリージョナル・オフィスとしての役割を視野に入れて、発展させたいとする前向きな姿勢が明確になりつつある、と私は感じている。

1984 年に開設されたカイロ・センターは 24 年間、途切れることなくほぼ 1 年交代で、おもに中東研究者がセンター長として派遣され、長期・短期間、エジプトはじめ中東に滞在する研究者の支援を行ってきた。

近年では、毎年、200～250 人の研究者(大学院博士課程を含む)がエジプトを訪れるようになっている。その内訳は、考古学や政治、経済、歴史、社会学などいわゆる文系が多いとはいえ、理・工・医・薬、農などいわゆる理系分野から、中東諸国をフィールドとする調査・研究、現地大学・研究機関との共同研究、国際学会への参加などのため、来訪人数が増えている。

訪問研究者たちは、カイロ・センターで、訪問者用 PC2 台、会議室の利用をはじめ、集合場所、荷物や文書の授受と保管、日本との連絡中継、研究者や大学・研究機関への紹介、通訳、ホテルや車の手配などロジに利用している。

国際シンポジウムや共同研究の支援に対する要望は、カイロ、中東に駐在する日本の学術関係機関として当然、強まっている。JICA や国際交流基金などと同様な、独立行政法人の駐在事務所としての法的地位を確立することが、次の課題である。

(坂井 定雄*)

*坂井会員は 4 月まで日本学術振興会カイロ研究連絡センター長の任にあった

会員の異動

【新入会員】

伊藤 寛了

稲山 円

木村 芙佐子

工藤 晶人

黒田 賢治

小村 明子

杉本 悠子

鷺見 克典

田熊 友加里

野中 葉

丸山 大介

森 まり子

森田 昌宏

山田 真樹夫

吉川 洋

Abdalla
EL-Moammen

Khaldon Azhari

Özbek Aydın

Ratib Muzafary

【所属先・連絡先の訂正・変更】

相川 洋介

青山 弘之

新井 一寛

飯野 りさ

石黒 大岳

石田 裕了

井家 晴子

岩木 秀樹

岩永 博

上野 雅由樹

遠藤 直

岡倉 徹志

岡野 恭子

加藤 眞佐美

金城 美幸

久保 幸恵

栗林 裕

佐藤 伸

澤江 史子

塩尻 和子

高橋 博史

竹田 新

竹田 敏之

竹谷 直樹

竹村 和朗

田村 真奈

内藤 陽介

乗松 彩奈

林 幹雄

速水(古川)

美緒

原山 隆広

坂東 和美

平山 健太郎

福島 康博
細谷 幸子

前田 弘毅
松尾 有里子
溝渕 正季
宮崎 元裕

森 晋太郎

山口 昭彦
山中 由里子
吉田 敦
吉村 武典

吉村 貴之

El-Mostafa
Rezrazi
Housam
Darwisheh
Tash Mehmet

【2007 年度末をもつての退会者】

石原 広恵／家 正治／石井 昭／大島 史／久保 一之／向後 紀代美／
児玉 昇／櫻井 清彦／櫻井 秀子／佐々木 淑子／佐藤 修／佐藤 都喜子／
須藤 隆也／高木 規矩朗／高橋 忠久／高山 博／瀧田 眞砂子／峠 潤／
戸田 聡／宝利 尚一／山尾 あおい／横溝 昌子／Akçadağ Gökür

【物故者】

甲斐 紀武／夏目 高男

寄贈図書

【単行本】

- イラン・パペ『イラン・パペ、パレスチナを語る——「民族浄化」から「橋渡しのナラティヴ」へ』ミーダーン(パレスチナ・対話のための広場)編訳、柘植書房新社、2008年。
- 粕谷元編『トルコにおける議会制の展開——オスマン帝国からトルコ共和国へ』東洋文庫、2007年。
- 坂本勉編『日中戦争とイスラーム——満蒙・アジア地域における統治・懐柔政策』慶応義塾大学出版会、2008年。
- 同志社大学一神教学際研究センター『宗教国家アメリカの現在』同志社大学一神教学際研究センター、2008年(DVD)。
- 同志社大学一神教学際研究センター21世紀 COE プログラム「一神教の学際的研究」『ユダヤ人の言語、隣接文化との歴史的習合 2007』同志社大学一神教学際研究センター、2008年。
- 松山洋平『イスラーム私法・公法概説——公法編』日本サウディアラビア協会、2008年。
- 水谷周『カアバ聖殿の歴史と事跡』日本サウディアラビア協会、2008年。
- Egawa Hikari – İlhan Şahin, *Yağcı Bedir Yörükleri*, İstanbul: EREN, 2007.
- The Japan Foundation Middle East Fellowship Program for Intellectual Exchange 2007, *Societies, Development and the Environment: Program Report, October 28-November 18, 2007*, Tokyo: Japan Foundation, 2008

【逐次刊行物】

- 『アジア太平洋フォーラム・淡路会議 2007』(財)兵庫県国際交流協会、2008年。
- 『一神教研究』4号、同志社大学一神教学際研究センター、2008年。
- 『岡山市立オリエント美術館研究紀要』22号、岡山市立オリエント美術館、2008年。
- 『季刊アラブ』124, 125号、日本アラブ協会、2008年。
- 『現代の中東』45号、アジア経済研究所、2008年。
- 『国立情報学研究所ニュース』39, 40号、国立情報学研究所、2008年。
- 『CAWW NEWS——未来通信』13号、(財)女性労働協会、2008年。
- 『CISMOR VOICE』8号、同志社大学一神教学際研究センター、2008年。
- 『dānah——日本クウェイト協会報』219号、日本クウェイト協会、2008年。
- 『地域研究』8巻1号、地域研究コンソーシアム、2008年。
- 『平成19年度 考古学が語る古代オリエント——第15回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、2008年。
- Newsletter no. 74, Research Centre for Islamic History, Art and Culture (IRCICA), Organisation of the Islamic Conference, 2007.*

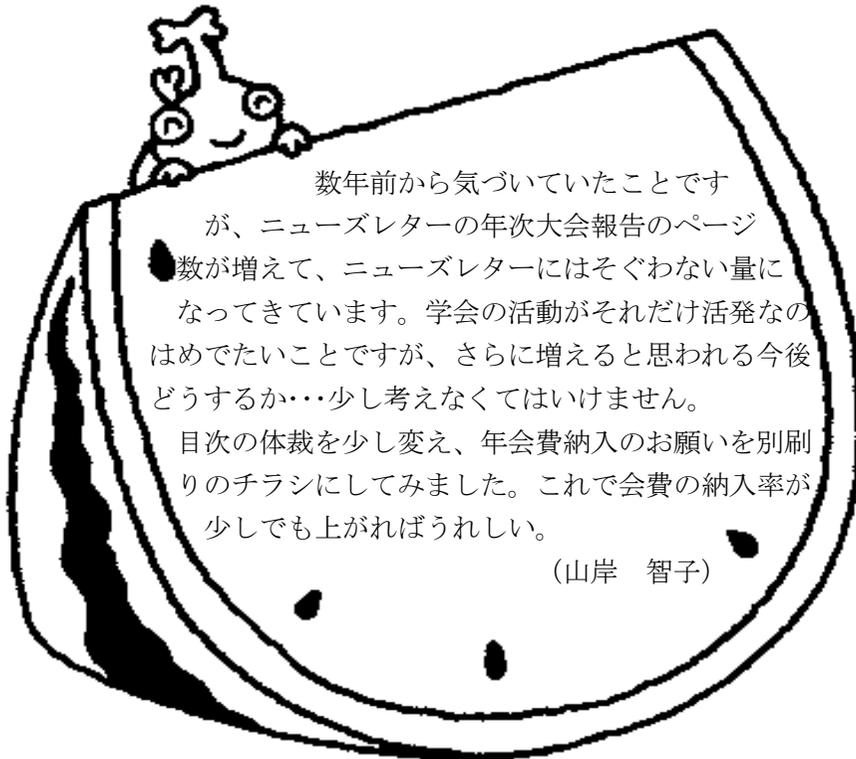
学会事務局より

はや今期の仕事も余すところ8ヶ月あまりとなり、このところの事務局は会員データベースの整理や規程の成文化など、比較的会員から見えにくい部分で、学会の体力をつける作業に取り組んでいます。その一方で、事務局も理事も、にわかには本格化しつつある法人化の動きなど、中東研究をとりまく内外の状況の急変への対応に追われています。

については、後者の対応の一環として、理事会は第13期役員選挙を例年より早めに実施することにいたしました。会員の皆様にはよろしくご了解いただきたく存じます。また、選挙権を行使できるように、会費の納入はお早めをお願いいたします。今年度より海外会員はクレジットカードによる納入ができるようになりましたので、ぜひご利用ください。

過日、ラウーフ・アッパーズ元カイロ大学文学部教授(1938-2008)の訃報がもたらされました。氏は本学会の創始期の活動とも関わりが深く、親日家で知られておりました。私自身もエジプトに留学するにあたって受け入れ先の教員を同氏に紹介していただきました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。(赤堀 雅幸)

編集後記



会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。2009 年度およびそれ以前の会費に未納がある方は、本号のニューズレターに郵便振替払込用紙が同封されておりますのでご利用ください。AJAMES に未送付分がある場合は、2008 年度以前の未納分会費の払込確認後お送りいたします。なお、請求会費額は 2008 年 6 月末日の振込確認に基づいておりますので、その後に納入され、請求に行き違いが生じた場合にはご寛恕ください。

日本中東学会ニューズレター 第114号

発行日 2008 年 7 月 30 日

発行所 日本中東学会事務局

印刷所 東洋出版印刷株式会社

日本中東学会事務局

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1

上智大学アジア文化研究所気付

Tel & Fax: 03-3238-3693

E メール: james@db3.so-net.ne.jp

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/>

郵便振替口座:00140-0-161096(日本中東学会)

銀行口座:三井住友銀行渋谷支店(普)5346808

(日本中東学会 代表 私市 正年)